



phassa4

illustratin by PurpleBoots

Do you like
「Yandere」?

死
因

は

リア
充

ゲ
ス

!



イラスト・桐ヶ谷チトセ
うっぴー

~ Contents ~

1. ヤンデレ(ヤンキーデレ)
2. リア充なう?
3. 告白。
4. ヤンデレ(病みデレ)

夏

Natsu



由比

Yui



ジエシカ

Jessica



1 ヤンデレ（ヤンキーデレ）

自分の家の中で緊張する機会というのは、人生において一体何回あるのだろうか？

と、結論の出ようはずの無い問題に真剣に向き合うほど俺こと四十万 宗太《しじま そうた》（十五才）は緊張していた。

リビングはクーラーが効いていて外と比べ大分涼しいはずだが、俺は熱射病寸前のように頭の中がぐるぐるしている。まさか、夏休みの宿題以上に頭を悩ます難問が出てくるとは思っても見なかったからだ。

難問というのは明白で、親父の再婚相手が来るのだ。

親父が再婚することは良い事だ。再婚すればウチの家庭事情を憐れんで飯を作りに来てくれる夏《なつ》さん（当年二十歳の短大生。隣家のお姉さんで昔はよく遊んで貰った）の負担が大きく減る。

それに、俺の妹の由比《ゆい》（当年七才）にとっても授業参観で親が来れるようになり良いことづくめだ。

再婚相手に問題があるわけではない。写真を見せて貰ったが綺麗なブロンド髪を上品に纏めたキャリアウーマンだ。

そう、親父の再婚相手は外国人なのだ。

しかし、それは俺の緊張には多少の影響しかない。受験を控える俺にとっては、ネイティブな英語を学ぶ絶好の機会でもあるし、妹の子守りに当てていた時間を勉強に回せる。

では、何が問題なのか？

それは、相手に俺と同年の娘が居るとのことなのだ。誕生日の関係で義妹となる。

同年の異性と屋根の下なんて漫画やアニメの様だ。しかも外国生まれの外国育ち。

しかも俺は、彼女いない歴=年齢。

漫画やアニメなら苦無く日本語を話すだろうがここはリアル。俺の拙い英語と経験で上手くコミュニケーションなんてできるのか？

ちらりと壁掛け時計を見ると秒針の進みがいつもの二分の一、三分の一に感じる。

「そろそろ来る時間か。どれ、迷ってるかもしれないから外に出てみるかな」

親父がソファから腰を上げたとき、ピンポンと玄関のチャイムが来客を告げた。

「よし、皆で出迎えるか」

親父の一言で俺と妹は連れだって玄関に移動した。

親父が玄関のドアの鍵を開けて、義母と義妹を迎え入れる。

「はじめましテ。レベッカヨ」

義母の発音は少しぎこちない感じがしたが十分聞き取れるものだった。

義母は、親父、俺、妹と順番に抱き締めた。

こういう挨拶があると映画や海外ドラマで見たいが、実際にされるとかなりドキドキした。

「この子はジェシカ。仲良くしてネ」

義母に促されジェシカと呼ばれた少女が前に出る。

義母譲りの綺麗な金髪に碧眼。白人特有の白い肌。

着ているものは「I LOVE NY」と書かれたTシャツにホットパンツ。

そして大きく自己主張している胸。

外国の子は皆日本人と比べ大人びているというのを実感する。

けれど、その顔には俺と同様に緊張してるのがありありと判る。

それを見て、俺は心が少し軽くなった。

「よろしくジェシカ。俺は宗太」

俺はそう言うと右手を差し出す。握手は世界共通の挨拶だからだ。

ジェシカは俺の右手を両手で握ると一瞬俺の唇にキスしてきた。

「チューだ。良いなー」

妹よ、その感想は何か間違ってる。

2 リア充なう？

「とまあ、そんなハプニングがあったわけよ」

俺は晩御飯の準備をしている夏さんの背中に今日あった事をかいつまんで話した。

「それで、そのジェシカちゃんは？」

「今は部屋で荷物片付けてるよ」

なぜ夏さんがうちに来て晩御飯の準備をしているのか。それは、あの後親父と義母はすぐさま新婚旅行へと旅立ったからである。

親父はあらかじめ夏さんに話してあったらしく、勝手知ったるなんとやらで夏さんはてきぱきと晩御飯の準備を進めている。キャベツをザクザクと刻む音がリズムカルだ。

「全く、俺のファーストキスがこんな形になるとは」

こっそり呟く。しかし夏さんにはしっかりと聞こえてたようだ。

「ん？ ファーストキスじゃないわよ？ 宗太のファーストキスは私が奪ったから」

さらりと爆弾発言。

「い、いつ？」

「宗太が四才の頃ね。あの頃の宗太は『夏お姉さんの旦那さんになるんだー』とか言ってたっけ。それで可愛くなって、ついね」

返す言葉がない。確かにその頃俺は良く夏さんと遊んでいたからだ。

「いや、そんな昔の事」

キャベツを切っていた夏さんの手が不意に止まる。

「昔の事？ 私もあの時ファーストキスだったのに」

夏さんの声が剣呑なものになる。こちらを向かないため表情は伺えないが、恐らくムツとしているのだろう。

どうしようか。脳内に色々台詞が浮かぶが、どれも夏さんを怒らせそうな気がして胃がキリキリする、嗚呼これがストレスか。

そんな空気を破ったのは、由比だった。

「お腹空いた～。夏お姉ちゃん今日の晩御飯何～？」

そう言うとテーブルの定位置、俺の隣に陣取る。

「もう少しでできるから。待っててね。でも、お茶碗運んでくれると嬉しいかな？ あ、宗太はジェシカちゃん呼んできてね」

剣呑だった夏さんの声がいつものモノに戻る。

「あ。ああ。すぐに呼んでくるよ」

由比は意味ありげに手を振って俺をリビングから送り出した。

由比ナイスフォロー。俺は心の中で親指を立てた。

二階に上がった俺は、ジェシカの部屋のドアをノックする。

「ジェシカ。晩御飯ができたからリビングに来てくれ。紹介したい人も居るんだ」

しかし。室内からは返事が無い。

「ジェシカ？ 入るぞ？」

ドアに鍵はかかってなかった。

室内に入ると、ベッドで横になっているジェシカが居た。

時差の為なのか、疲れが溜まっていたのか、あるいはそのどちらもか。ともかく、ジェシカは心地良さそうに眠っている。

さて、どうするか？

このまま寝かせても良いだろうが、夜中に目を覚まして空腹に気づくというのめかわいそうだ。

うーむ。ご飯はカップ麺でも用意しておけば良いか？

俺は寝冷えしないようタオルケットをかけようとしたところで、不意に腕を捕まれた。

「じえ！？」

どうやら、無意識の行動らしい。

が、体勢がマズイ。

なぜなら、俺の腕は抱き枕のようにジェシカに捕らわれている。

柔らかい二つの感触がジェシカが呼吸するたびに二の腕に押し付けられる。

しかも、引き抜こうにも手がガッチリ捕まれているため容易には抜けない。

解放されるためには、ジェシカを起こすより他はないが、この状況だ。誤解を与えかねない。

これから長く付き合うのに誤解を与えるのはマズイ。

「お兄ちゃん？ ご飯冷めちゃうよ？」

そう言いながら、由比がひょっこりと現れた。

助かった。由比がいれば変に誤解されることもないだろう。

「由比ナイスタイミング。ちょっと助けてくれ」

「了解。夏お姉ちゃんは知らない方がいいか」

由比が小声で何か言ったようだが、俺には聞こえなかった。

その日の晩御飯はいつもより賑やかな食卓だった。

夏さんとジェシカはお互い料理の話題で盛り上がった。

楽しい食事の時間も終わり俺と由比はリビングでゲームを楽しんでいる。

夏さんは自分の家に帰宅した。何でも見たいドラマが有料チャンネルであるらしい。残念な事にうちはそのチャンネルと契約してないので見るができなかった。

ガラッーリビングと脱衣所を繋ぐドアが開く音がした。

音のした方を向くとジェシカが、ドアから顔だけを出してこちらを覗いている。

「ソウタ。着替え一式二階に忘れちゃった。取ってきてもらっていい？」

「いや、それは……」

思わず口ごもる。

そうだろう着替え一式ということは、当然下着も含まれている。家族になったとはいえ会って初日。照れがある。

「あっ。そうね、ごめんなさい自分で取りに行くわ」

俺の態度から察してくれたのか、ジェシカは一旦脱衣所のドアを閉めると、少ししてから出てきた。

が、俺はすぐさま視線をはずす。ジェシカは素肌にバスタオルを巻き付けただけの格好で出てきたからだ。

上気した肌に、ピッチリ巻き付けられたバスタオルはっきり言って目の毒だ。

「どうしたのソウタ？カーテンなんか見つめて？」

「いいから着替え取ってこいよ」

「変なソウタね」

ジェシカはそう言うと二階に上っていった。

「はあ。目の毒以外の何者でもないよな」

呟き、麦茶を口に含む。

「お兄ちゃん、ジェシカお姉ちゃんみたく、おっぱい大きい方が好きなんだ？」

「ブッ！？ げほっ、げほ」

思わず麦茶を吹いてしまった。

「私も早く大きくなれないかなー」

吹き出した麦茶をティッシュで拭き取っている間に由比は俺が飲んでいた麦茶を飲み干す。

「お前それ俺の飲みか」

「やっぱり大きい方が好きなのかなあ？ おっぱい。お兄ちゃんはどう？」

俺の話の遮って、かつ話題を戻し、回答しづらい質問をぶつけてくる我が妹、由比。この奔放さは間違いなく親父の血を引いてるなど、改めて思ってしまう。

「ま、まあ。人それぞれなんじゃないのか？ 好みの問題なのだし」

思わず一般論で返す。

ちなみに、胸のサイズは、ジェシカ>夏さん>由比の順だ。食事の最中『食べているものの差か』と夏さんがポツリと漏らしたのが印象的だった。

「うん。それで、お兄ちゃんの好みは？」

しまった。完全に墓穴を掘った。

「さ、さて。お風呂が空いたことだし俺も入ろうかな～」

「あ。逃げた」

逃げるが勝ちだ。

俺は束の間の一人の時間をお風呂でゆっくりと堪能した。

小一時間は入っていただろうか思わず長湯をしてしまった。

髪を拭きながらリビングに戻ると、ジェシカが麦茶片手に、テレビを見ていた。

「由比は寝た？」

「ええ。『お兄ちゃんが出てくるまで起きてるんだ』って息巻いていたけど、うとうとしだしたから、二階に運んだわ」

「ありがとう。手間かけたね」

「いいわよ、家族になったんだし」

そう言って微笑むジェシカ。その微笑は、今まで見た中で一番自然な笑みだった。

今なら、どうしてキスしたのか聞けるかもしれない。

しかし、あえて聞かないという選択肢もある。もっと仲良くなってから聞くというのがお互いのためだろうか？

「キスしたこと怒ってる？」

ジェシカが申し訳なさそうに僕を見る。

そんなに、考えていることが表情に出てたかな？

「いや、怒ってないよ。ただ、良ければ理由を聞かせて欲しいかな」

僕は知らず知らずのうちに触れていた自分の唇から指を離した。

「理由。理由ね……」

そう言って、ジェシカは考え込む。

そんなに難しいことを聞いてしまったらだろうか？

「二番目に大きな理由は、『安心したから』かしら。パパとは向こうで何回か会っていたし、ママと上手くいくだろうと何となく思っていたわ。実は私、昔の宗太の姿を写真で見たことがあったの。知ってる？ パパったら財布の中に宗太と由比の写真を入れているのよ？」

親父が俺達の写真を財布に入れているのは知っている。

あれは俺が小学校を卒業した時に撮ったものだ。由比は七五三で着るような着物を着てはしゃいでたっけ。

「その写真の子を見たときは仲良くなれる気がしたけど、昔の写真だからね。実際は会ってみるまでわからないじゃない？ けれど、宗太から握手を求められたとき、写真の頃から変わってないと思えてそれで安心したの」

『小学校を卒業した時から変わっていない』と言われるのは決して誉められる事だけではないだろうが、ここはポジティブに受け止めよう。

「それで、一番の理由は教えて貰えないのかな？」

「知って、私の事。嫌いにならない？」

「理由次第かな。というかその質問は卑怯だ」

「そうね。理由。キスした理由。一番の理由。それは、宗太の事が好きになったから」

ジェシカはそれだけ言い終わるとその場を逃げるように、おやすみと言って自分の部屋に帰った。

やっぱり卑怯だ。

俺はその夜、ジェシカの好きがどういう好きかを考え込み、明け方近くまで寝れなかった。

ギシリー。ベッドが沈み込む音がして俺は目を覚ました。

「由比？ 起こしに来てくれたのか」

寝ぼけ眼を薄く開けると、人の目が飛び込んできた。

「!？」

予想もしてない光景に思わず息を飲んだ。

「な、夏さん。驚かさないで下さいよ」

声が震えたのは一瞬で、目の前の顔が知り合いだと分かり少し余裕が生まれた。

「おはよう。宗太。驚いた？」

俺は、夏さんから目だけをそらす。

「驚いた、何でもものじゃないですよ。心臓が止まるかと思いました。それであの、顔離してもらえませんか？」

お互いの息が唇に届くほどに近い距離。わずかにでも顔を上げれば夏さんとキスできるだろう。

「動悸が激しいのはそれだけじゃないでしょう？」

言われて視線を下に向けて気づく。夏さんの上半身が俺の上半身に寄せられている。タオルケット越しに伝わる体温が熱い。

「夏さん、からかわないで下さい」

夏さんは何も言わず、俺を見つめる。

トントントンー一階段を誰かが上がってくる音がする。

「誰かが来ますから、退いてください」

「そうね誤解されるのも嫌だしね。でもせっかくだから起してあげる」

そう言うと夏さんは顔を遠ざけ俺の肩を掴んで上半身を起しにかかる。

「ひゃつ」

不意に夏さんが体を起す途中でバランスを崩して倒れこむ。肩を掴まれている俺は不意の事に対応できず、夏さんに覆いかぶさる様な体勢になる。

コンコン、ガチャリ。ノックと共にドアが開けられる。

「ソウタ？ 夏さんは……」

バタン！ドアが勢い良く閉じられた。

「……誤解されましたね」

「そうね。後で誤解を解かないとね。私は誤解でも構わないんだけど」

夏さんはそういつてにこやかに微笑む。全く動じてない。こういうときに年の差を実感する。

「からかわないで下さいよ」

俺がリビングに行くと、由比はご飯を、ジェシカがシリアルを食べていた。

「おはよう。二人とも」

俺が声を掛けると、由比はにこやかに、ジェシカは俯いて答えた。

「お兄ちゃん。おはようずいぶん寝坊だね」

「おはよう。ソウタ。その、さっきはゴメン。邪魔しちゃったみたいで」

ジェシカはバツが悪そうに表情を歪めた。

「ジェシカ。それは誤解だ。夏さんに無理やり起されそうになって、バランスを崩しただけの――事故だ」

「そうそう、事故だからジェシカちゃんが気にすることじゃないわ」

夏さんがリビングに姿を現すと俺の弁明を援護してくれた。

「さ、せっかく作ったご飯が冷めないうちに召し上がれ」

朝食は、スクランブルエッグにカリカリに焼いたベーコン。生野菜サラダとジェシカが普段食べていたものとなっていた。

たわいない会話をしながら朝食を済ませると、すぐさま勉強の時間となる。

我が家では、そのようにルール決めた。

俺と由比は自分の夏休みの宿題を、ジェシカは夏さんに付いて貰って日本の勉強との進捗比較をする。幸い夏休みはまだまだ、十分ある。新学期に転入して勉強に困ることが無いようにとの親父の配慮であった。

「うーん。もう飽きたー」

漢字ドリル開始一時間で由比が音を上げた。

「まだ始めたばかりだろう？」

「お兄ちゃん厳しいー」

「はいはい、それじゃ少し休憩にしましょうか、スイカ切ってくるから少し待ってて」

「やったー。スイカ〜」

由比は無邪気に喜んでる。

ジェシカはも目頭を指で揉んでほぐしている。

「ジェシカ、日本の勉強はどう？」

「ん。英語と数学は問題ないわね。ただ、理科と現代文はもう少し掛かるかも。社会と古文、漢字の書き取りは壊滅的ね」

やはり言語の壁は大きい様だ。

「古文は、正直日本人でも読めない人多いからな。そう悲観することでもないさ」

「そうね、私も宗太には苦労させられたわ。さ、スイカどうぞ」

夏さんが三角に切ったスイカを一人一つ一皿ずつ渡す。

「その節はお世話になりました。頂きます」

スイカにかぶりつく。スイカ特有の汁気が喉を潤す。

「塩は各自お好みでね」

夏さんは見えている種を取り除くとたっぶり目に塩を掛けてからスイカにかぶりついた。

「私要らない〜」

由比は塩に目もくれず種ごと果肉を食べ、種だけを吐き出している。少し行儀悪いかな。

「スイカには砂糖じゃないの？ 少なくとも私の近所ではそうやって食べてたはずだけど」

ジェシカは目の前に置かれた塩を怪訝そうに見つめる。

俺は思わず感心してしまった。

「こんなところにも文化の違いがあるとはな。ま、騙されたと思って試してごらん。そうそう初めはほんのうっすらで」
シャクリ。

塩が振りかけられたスイカをひとかじりするとジェシカの表情が驚きに包まれた。

「なにこれ？ しょっぱいのに甘い。この美味しさ、これが本当のスイカの味なの？」

「だろ？ と、いっても振りかければ振りかけるほど甘味が増す訳じゃないから、自分に合った量を探すと良いさ。俺には夏さん程振りかけるとしょっぱすぎて駄目だけどな」

俺が少し大袈裟に言うとも夏さんもそれに乗ってくれる。

「由比ちゃん。宗太が私の事味音痴って虐めるの？ 酷いと思わない？」

「もう、お兄ちゃん夏お姉ちゃん虐めるのメッだよ」

俺達のコントみたいなやり取りを微笑むジェシカ。

本当に良い家族になれるかもしれない。

おれは心の底からそうなれることを願った。

午後は基本的に各自自由だが、由比の提案で近場のプールへ行くことにした。

近場のプールは市営のプールで料金が安い割りには、流れるプールに、ウォータースライダー、低年齢用の浅いプール、競技用の二十五メートルプールと揃っていてかなり豪華な部類に入る。

俺は男子用更衣室を出てすぐ脇ビーチシートで三人を待っていた。

最初に出てきたのは由比で学校指定のスクール水着を着ている。

始め由比は可愛くないとスクール水着を着ることをゴネたのだが、迷子になったときのリスクを丁寧に説明すると。言い分を聞いてくれた。

次に出てきたのは、夏さんで、上下が別れた水着だ。上半身側はキャミソールタイプで、下半身側は露出で言うとピキニ二ほどは無い。夏さんのスレンダーな体型と相まって非常にかっこよく見える。

最後に出てきたのがジェシカだが。なんと言えれば良いのか、良くも悪くも目立ってしまった。

プールサイドがざわつく。

理由は明白だ。中高生や、大人達、プールサイドの監視員までもがジェシカに注目している。

いや。正確には、ジェシカの胸にか。

ジェシカの水着は、昔夏さんのお母さんが夏さん用にバーゲンで買った物だが、サイズが合わないということでお蔵入

りになっていたモノだ。急遽プールに行くことになり、借りたわけだが、なるほど確かに夏さんでは胸が残念なことになるだろう。

「どうしたのよ？ 宗太。残念そうな溜め息ついて？」

「いや、何でも無いよ。それより、何処で泳ごうか？ ジェシカはどれぐらい泳げるの？」

ジェシカは大きく肩を竦めると、ため息と共に下を向いた。

「ジェシカひょっとして、泳げ無いの？」

ジェシカはコクコクと無言で肯定した。

「じゃ、二人で一緒に特訓だね。お兄ちゃんがコーチ」

由比の一言でジェシカの表情が明るくなる。

泳げ無い同士を見つけたからだろうか。

「それなら、あっちの二十五メートルプールで訓練した方がいいわね」

夏さんの案内で二十五メートルプールへと連なって歩く。

その最中やはり、視線が集中するジェシカの胸だった。

組み合わせジャンケンの結果。

俺と由比。

ジェシカと夏さんの組み合わせとなった。

ジャンケンの結果にジェシカは不満ありありだったが、其処は公平な結果として受け止めて貰った。

「やっぱり由比には、お兄ちゃんが必要なんだよ」

「はいはい。いいからバタ足の練習。変に力入ると沈むぞ」

俺は進行方向に人影が無い事を確認しつつ由比の手をひき後進する。

由比は俺の手をビート版代わりに泳ぐ練習をしているのだ。

運動しているためなのか、由比のと触れている手が熱い。水中だというのに、熱が引かない。

ふと隣のレーンを見ると、ジェシカも由比同様に夏さんに手を引かれバタ足の練習からしている。

しかし、夏さんは半ば呆れている様だ。

「どうして浮かないのかしらね。そんなに大きな浮き袋が二つもあるに」

「はあ。しかし、浮かないものは浮かないんです」

そんなやりとりが隣から聞こえてくる。

「うーん。バタ足とか息継ぎとか教える前に浮ぶ事を教えた方が良いのかもしれないわね。もう少し深いところで訓練しましょうか」

夏さんは器用に立ち泳ぎしながら二十五メートルプールの一番深くなっている部分にジェシカを誘導する。

「さ、ここなら十分だから、力を抜いて御覧なさい？」

「ナ、ナツさん。ま、まだ離さないでくださいねッ」

足がプールの底に着かない事が相当不安なのだろう。ジェシカは腰が引けている。

「掴んでいるから、ゆっくりで良いのよ」

ようやく慣れたのか、ジェシカが全身の力を抜いて仰向けに水面へ浮ぶ。

と、水面に二つの蓮の蕾が浮き上がった。

いや、正確には蓮の花などは無く、ジェシカの胸なのだが。

俺はそれに気取られてしまい、レーンを仕切る浮き具、コースロープフロートにぶつかってしまう。

当然ぶつかった衝撃はコースロープフロートを伝い波及する。

と、何の偶然か、コースロープフロートの一部がジェシカの脇腹をくすぐった。

「ひゃん！？」

予期せぬ刺激にジェシカの体は一気に硬直し、沈み始める。

そうすると、パニックだ。

ジェシカは手当たり次第の物を掴もうと全身をバタバタさせる。

「ちょ、ちょっと急に暴れないでよ」

そして、それは当然の様にジェシカの手を掴んでいた夏さんが巻き添えを食らう。

激しい水しぶきが上がるなか、ようやくジェシカはコースロープフロートを掴み、体を安定させることが出来た。

「きゃああああ」

夏さんが不意に叫びを上げて、体全体を丸める。

「夏さん。どうしました!？」

俺は、由比をコースロープフロートに掴ませると、夏さんに近寄ろうとしたが。

「き、来ちゃ駄目!」

夏さんが片手で水をバシャバシャと浴びせてくる。

「い、いや。夏さん、どうしたんですか？」

キャア、キャアと夏さんは半狂乱に水を浴びせてくる。

と、バシリーー水以外の何かが俺の顔面に当たった。

「う、うわ。ごめんなさい夏さん!」

俺はそれの正体。夏さんが着ていた水着のトップを夏さんに渡すと急いで後ろを向いた。

3 告白

そんな事も有りながら、結局俺達はプールの閉館時間まで遊んだ。

陽はまだ高く五時だと言うのに夕方という感じはしない。

俺達は休憩と髪を乾かす事を兼ねてプール外の売店で瓶ラムネを飲んでいる。

ラムネの炭酸が蒸し暑い空気を和らげるようで心地いい。

「あー。楽しかった！ ね、お兄ちゃん明日も来たい」

由比は俺を見上げて無邪気に言う。

「そうだな。明日も宿題をちゃんとやったら考えてもいいかな」

俺は少し意地悪に言うのと由比はほっぺを膨らませる。

「えー？ ね。ジェシカお姉ちゃんもまた来たいよね？」

ジェシカは瓶ラムネをラッパ飲みしようとして、ビー玉が塞いだ飲み口を不思議そうに見ていた。

「ワタシは折角だし海に行ってみたいかな。日本の海は綺麗だと聞いてるし、少しは泳げるようになったから」

カラン。とビー玉をつつき落とし再びラッパ飲みに挑戦するジェシカ。

「ジェシカお姉ちゃんすぐに泳げるようになって羨ましい。やっぱりおっぱいの差か」

由比は真っ平らな自分とジェシカの見比べながら呟く。

「由比ちゃんもそのうち大きくなるわよ。私と違って」

俯いた夏さんが持つ瓶ラムネにいつそう力が入った気がするが見なかったことにしよう。

「んん。さて、そろそろ髪も乾いたみたいだし帰ろうか？ 実はお腹が空いて。夏さん今晚は何？」

自分でもあからさまな話のすり替え方だとは思いますが、咄嗟のフォローが浮かばなかった俺にはこれが精一杯の言だった

。

「そうね……冷製トマトシチューはどうかしら？ ジェシカちゃん、セロリとトマトは食べられたわよね？」

「ええ。大丈夫です。実は私もお腹が空いて。泳ぐって結構ハードなんですね」

「由比もお腹すいたー。でも、ピーマンとセロリは少ない方が良くないかな」

由比やジェシカが話しに乗ってきてくれた。

上手く話を切り替えられたようだ。

「さて、それじゃ帰えろうか」

俺達はそれぞれ水着の入ったバッグを持つと店を出た。

売店から少し離れ住宅街の路地に入る。

歩道と車道が明確に分けられておらず広がって歩いているとよくクラクションをならされる道だ。

「お兄ちゃん、手繋いで」

そう言うや由比が俺の右手にしがみつく。

「仕方ないな」

「それじゃ、ワタシは左手に」

ジェシカがさも当然の様に俺の左手を握る。

「い、いや。流石にそれは」

いいよどむ俺の脳裏に昨日の出来事がフラッシュバックする。

柔らかかったなあ。

って違う！

「それじゃ、私は背中かしら？」

夏さんが俺の体を後ろから抱き締める。

「な、夏さん！？ これじゃ動けないですよ」

夏さんの表情は見えないが、たぶん意地悪く笑っているのだろう。

「あら？ 私だけ除け者なんて宗太は何時からそんな事が言えるようになったのかしら」

夏さんの手が腰の方へと下がる。

「ちょ、ちょっと夏さん！」

「皆お兄ちゃんが好きなんだねー。モテモテだよー」

由比が冗談とも本気ともつかないような声で俺をからかう。

「由比。冗談が過ぎるぞ」

俺はたしなめようと由比を見ると、由比は残念なものを見るように俺を見上げてきた。

「うわー？ お兄ちゃん気づいてなかったの？ ジェシカお姉ちゃんも、夏お姉ちゃんも、わたしも皆お兄ちゃんの事が好きなんだよ？」

言われて、ジェシカの方を向くとコクリと頷かれた。

否定されない！

「な、ななな、夏さんも？」

思わずつかえてしまう。

俺を抱き締める手の締め付けが強くなった。

なんとと言う不意打ちだろう。

あまりの事態に頭が真っ白になる。

動悸が強くなって、自分の心音がやけに響き、蟬の鳴く声なんて聞こえやしない。

プッー。

不意に後ろからクラクションが鳴らされた。

その音で我にかえった俺は、道の端に寄る。

車が俺の脇を通りすぎると、体が自由なことに気づいた。

いつのまにか由比、ジェシカ、夏さんが離れていた。車が来た為に放してくれたのだろう。

それからの帰路は誰も何も言わず、気まずい空気のままだった。

俺は、プールよりも帰路のほうがかえって気疲れしてしまった。

家に着くと俺は真っ先に自分の部屋へ向かった。

ベッドに仰向けに倒れこむ。

少しでも自分の考えを纏めるためにリラックスした体勢で考えたいからだ。

何か？ 当然さっきの帰り道三人から告白されたことだ。

彼女居ない暦＝年齢の俺にとって見れば、まさに青天の霹靂。

どう答えたらよいのか？ それだけが頭の中をぐるぐると駆け巡る。

「うわああああ。コレってリア充じゃないか」

三人から一片に告白される。コレは間違いなくリア充だろう。

しかし、問題が無いわけではない。

そのうちの二人が身内なのだ。

まず、由比。

俺の実の妹にして、七歳。小学二年生。

うん、何と言うかマンガでしかないようなシュチュエーションだ。

そもそも、由比は七歳。好き嫌いということは判っても怪しい。

それに、間違いでも起そうものなら、親父の鉄拳制裁が飛んでくるのが目に見える。

「ホント、由比は家族として俺が好きなのか、それとも個人として好きなのか、その辺の区別ついているのかな？」

次に夏さん。

近所の、そして昔から構ってくれたお姉さん。

確かに、あこがれていた時期もあった。けれど、それは昔だ。

何より、これ以上夏さんに何かを求めるのは、ずうずうしく思えてならない。

「ほんと、夏さんには頭が上がらないよ」

最後にジェシカ。

俺と由比にとって新しい家族。

正直な所、よく判らない所がある。

それも仕方の無いことだ、何せ出会ってから未だ二日目。

短い時間で理解し合えるほど俺は察しが良い訳でもない。

「うん。ホント判らないな」

そんな事を考えていたら、俺はいつの間にか寝入ってしまった。

コンコン。

ドアをノックする音で、寝入っていた事に気づいた。

壁掛け時計を見ると六時半。

ザックリと考えても一時間は寝ていた様だ。

コンコン。

再びドアがノックされた。

「晩御飯かな？ もう行くよ」

俺がそう声をかけると、ノックをした主は、俺の扉の前から去る足音が聞こえた。

4 ヤンデレ（病みデレ）

リビングに下りると、俺以外の全員がテーブルに着き食卓には食事の準備は整っていた。

しかし、昨日の晩御飯とは違って、誰もが黙って俯いて居る。まるで、誰かが亡くなった後の食卓のようだ。

「あ。待たせたみたいだね。冷めないうちに食べようか」

俺は席に着きながら、沈んだ空気を払拭しようと思えば慣れないお世辞を言ってみる。

「お兄ちゃん。コレ、冷製トマトシチューなんだけど」

妹よ、話に乗ってくれるのは良いが、正しい指摘は今は無用だ。

「宗太。気を使ってくれるのは良いけど、先に問題をはっきりさせない？」

夏さんが静かに聞いて来る。

その、落ち着き具合が妙に引かかる。しかし、夏さんの提案はもっともだった。

ジェシカの方を向くとコクンと頷かれた。

由比もそわそわしている。

やはり俺だけでなく皆気になって仕方ないらしい。

「そうか。じゃ、食事前だけハッキリしておこう。俺の返事はNOだ。この中の誰とも付き合うつもりはない」

三人の反応をそれぞれ見る。

一番分かりやすくがっかりしているのは、由比だ。みるみる顔が赤くなり怒っている事がありありと判る。

ジェシカは腕を組んでワザとらしく大きくため息をついた。不満なのが十分判る。

夏さんは何事も無かったかのように平然としているが、やけに髪の毛を弄っている。

やはり今朝の事や、由比が夏さんも俺の事が好きと言うのは出任せだったのだろうか？



気まずい沈黙が食卓を支配する。

そんな中口火を切ったのは夏さんだった。

「そう。それじゃ、一応返事は貰えた訳だし、食べましょうか。っと、ごめんなさい。仕上げを振りかけるの忘れていたわ……これでよし。さ、召し上がれ」

夏さんは一旦キッチンへと戻り粉チーズ取ってくると、それを自分以外の皿へと振りかけた。

「頂きます」

一口口に含む。トマトの酸味にピーマンやセロリの苦味がアクセントになってシチューのコクを引き立てる。サッパリとした味なのに長時間煮込んだシチュー特有の旨みがある。

ただ、少々苦味が出すぎている気がするが、コレは大人の味というものなのかもしれない。

「ん。美味しい！ 夏さん。どうやって作ったの？」

夏さんは、柔らかく微笑むだけで、答えてはくれなかった。恐らく秘密ということなのだろう。

ガタン！！

俺の隣で食べていた由比が不意にテーブルに倒れ込んだ。

ピクピクッと指先が痙攣《けいれん》し、口元からは泡を吹いている。

「由比！？ どうした！ クッ！？ 頭が、痛い」

脳髄に電極を刺され電撃を流されているような鋭い痛みが俺を襲う。

ふと、見るとジェシカも同じように苦痛に顔を歪めている。

しかし、俺達と対照的に夏さんは平然な顔をして俺達を見ている。

「夏さん。救急車を！ 早く！！」

しかし、夏さんは動じた様子も無く、シチューを食べている。

「夏さん！ 由比がおかしい、死んでしまうかもしれないんだ！ なのにどうして！？」

このとき初めて夏さんの事が理解できなくなった。

目の前で、急に人が倒れ泡を吹いたら普通はもっと驚き、声かけとかの対応をするはずだ。

それが、一切無いというのは……………予定道理だから？

「ナツ。何の毒を盛ったの？」

俺の一步先行く質問をジェシカが夏さんにぶつける。

毒？ そうか、さっき振りかけた粉チーズの中に毒が混ざっていたのか。

即効性の毒のようだが、種類さえ別れば、病院で適切な処置が行われ助かる確率はグンと高くなる。

「教えて下さい。夏さん！」

頭痛で今にも意識を手放してしまいたくなるのを必死に押さえ、睨みつけるように夏さんを見る。

ジェシカも、俺と似たような表情で夏さんを睨む。

「教えてあげても良いけど、条件があるわ」

あくまで、表情を崩さず夏さんが俺の方へ微笑みかける。

この状況で笑えるなんて、一体今の夏さんはどうしてしまったんだ。

「条件は、簡単よ。宗太、私のモノになりなさい」

イミガワカラナイ。

私のモノになるとは何を指しているんだ？

「宗太。私が昔からどれだけ愛情を注ぎ込んだ貴方知らないでしょ！ なのに貴方ときたらおっばいの大きい子が来たらそっちに目移り！？ 冗談じゃないっての！ おっばいだけが女の子の価値じゃないでしょ！ 何でも私の言うことを聞いていた宗太は何処に行ったの！？ だから貴方は私の宗太じゃ無い！ つまり、私のモノにならない貴方なんか要らない。ってこと」

立て板に水とはこの事だろう、一言も噛まずに夏さんは言い切った。

しかし、聞こえたと理解できたは、まったくの別物で、何度脳内で内容を反芻しても理論が全く成り立っていない。

「それじゃあ、俺が夏さんのモノになれば、救急車も呼んでくれるし、何の毒を使ったか教えてくれて、由比やジェシカも助けてくれるんですね？」

夏さんはキョトンとした表情をした。

何故だ？ 俺は何か変な事を言ったか？

「どうして、由比ちゃんやジェシカちゃんを助けなくちゃならないの？ 私が欲しいのは宗太だけなのに」

駄目だ。

話が通じない。

どうすれば良いのだろうか？頭痛が酷くなる一方で、良い案なんてものは一切浮かんで来ない。

その時、ようやく気づいた。ジェシカがテーブルに居ないことに。

ジェシカは何処に？

だが、それは辺りを見回したときに目に入った。

ジェシカはキッチンへ行き蛇口から大量の水を飲んで、胃の物を吐き出していたのだ。

確かに毒物を飲んですぐさま吐き出す、正しい対処法だが、この毒は即効性。何処まで効果が有るのか判らない。

「あははは。ジェシカちゃんそんな事してもこの毒には意味が無いの。キッチンと解毒剤を打たないと苦しむ時間が延びるだけよ？ 最も今手元にあるのは一つだけだけどね」

暗に解毒剤を打たない限り死ぬと言っているのか。

一つ。少なくとも一つは今手元に有るのか。

だったら、今すぐ嘘をついてもそれを手に入れてそれを由比とジェシカと分ければ少しは毒が回るのが遅くなるんじゃないか？

「ああ。言ってなかったけど、この解毒剤。中途半端に飲むとかえって状態が悪化するものよ？優しい宗太」
見抜かれてる。

待てよ？ ひょっとしたら解毒剤を持っているというのもブラフ。嘘かもしれない。

「さあ、宗太私のモノに、カヒュッ」

空気が抜けるような音がして、夏さんは喋ることが出来なくなってしまった。

夏さんの喉に突き刺さった包丁。

素人目にも判る致命傷だ。

殺したのは、ジェシカ。

その顔は仮面の様な無表情。

「ジェシカ、ど、どうして？」

殺したのか？ その一言が出てこなかった。

いや、聞くのが怖かったのだ。

「ハァ。やっぱり解毒剤持ってないか」

ポケットを漁っていたジェシカがため息と共に呟くと、突き刺した包丁を一気に引き抜いた。

噴水の様に夏さんから血しぶきが上がり、天井、テーブル、床、ジェシカを赤く染めていく。

真っ赤な鮮血がジェシカの金髪に彩りを添えて、恐ろしいはずの彼女をととても美しく引き立てた。

「さてと、ソウタ。どうしようか？」

ジェシカの声が酷く遠い。

頭痛は相変わらず暴風雨の様に俺の頭をかき回す。

まぶたも重くなってきたし、全身が酷くけだるい。

「た、助け……」

ああ。このままでは、助けを呼んだ所で間に合わないだろう。

ジェシカが近づいてくる。

ジェシカもきっと相当苦しいのだろう。歩き方がよたよたとしている。

ようやく、俺のそばまで来ると耳元でささやく。

「うん。ソウタ。私が助けてあげるよ。この苦痛から救ってあげるよ。大好きだよ。ソウタ」

首にチクリと何かが刺さる。

次いで来るのは熱いような、寒いような不思議な感覚。

けれど、それは頭痛を急速に治めてくれた。ありがとう。とジェシカに言いたいのに声が出ない。

ああ。

一体何が悪かったのだろう。

最後というのは未練が沸くものなのか。

けれど、そんな事考えなくて良いんだ。

俺は、ジェシカが与えてくれた安息の中意識を手放した。



E N D

死因はリア充DEATH IS END.

「それじゃあ、また来るから」

彼はそう言って、学校からの届け物であるプリント類を置いて部屋を出て行った。

彼は今の私にとって、唯一の理解者だ。

それ以外の人たちは、もはや誰も信じられなかった。

自分でも、随分と追い詰められてしまっていると実感している。

どうしてこんなことになってしまったのか――と何度世界を呪ったことか。

おそらく、いずれは彼のことしか見えなくなってしまうだろう。

そして、自分の身体も心も、感覚を無くしてしまうだろう。

私はそれでも良いと思っていた。

彼だけが、私を救ってくれるのだから。

「はやく私を此処《ここ》から連れ出して欲しい」

此処《ここ》とはいった何処《どこ》なのか。

自分でもわからないまま、ひたすらそればかり願っていた。

とある高校のとあるクラス。このクラスには極めて特徴的な二人の生徒がいた。

一人は男子。名前は空条昇《くうじょうのぼる》という。一見どこにでも居そうな平凡な男子生徒ではあるが、どこか達観しているような、物憂げなその雰囲気からクラスでは浮いた存在だった。

もう一人は女子。名前は一ノ瀬命《いちのせみこと》という。成績優秀で容姿端麗という言葉の形にしたような女子生徒だ。まぶたの辺りで綺麗に切りそろえられた前髪と、腰くらいまである長い黒髪が特徴で、いかにも優等生といった雰囲気を醸し出している。

クラスから注目の的とされている一ノ瀬を光と例えるならば、教室の隅でずっと窓の外を眺めている空条は闇と言えるだろう。

そんな正反対な二人が関係する時、物語は大きく動き出す。

二人の男子生徒が、授業中にうわさ話をしていた。

「おい、そういえばお前知ってるか？」

「知ってるって何をだよ」

「うちのクラス委員長の良くない噂のことだよ」

「委員長って、一ノ瀬のことか？」

一ノ瀬の名前が出た瞬間、二人の男子生徒の近くに座っている他の生徒も聞き耳を立て始めた。

「そう。実はあの一ノ瀬、何人もの男子生徒を掛け持ちして交際してるらしいんだよ」

「は？ お前それマジで言ってるの？ だって一ノ瀬と言えばまるで優等生の鏡みたいな生徒だぜ？ そんな子がまさかそんな……」

「俺も初めて聞いたときは驚いたよ。でも実際に一ノ瀬と付き合った事がある奴がそのことを他の生徒に話してたみたいなんだよね」

「信じられない。あの一ノ瀬が」

彼が信じられないと思うのは無理も無い話で、クラスの中で一ノ瀬の浮いた話を聞いた事がある者など誰もいなかった。

確かに一ノ瀬は美人だが、クラス委員長を務めていることもあり、クラスの中ではキツ目な印象を与えていた。とはいえ、女子からも人気があり友達が多い。それだけに今回のような話が広まれば、彼女の立場は危うくなるだろう。クラスの女子生徒の関心事といえば、男女関係についての話と相場が決まっているのだ。

「一ノ瀬さん。授業で出した宿題は明日中に集めて職員室まで持って来てくださいね」

「わかりました」

教師がいきなり一ノ瀬の名前を呼んだため、噂話をしていた男子生徒の二人は少し驚いた。

授業が終わり、一ノ瀬は次の授業の支度をしていた。

「……くだらない」

一ノ瀬は吐き捨てるように言った。実は先ほどの男子生徒たちの会話は全て彼女の耳にも届いていた。

一ノ瀬にとっては、あの男子生徒たちの話など正直どうでもいい事だった。とはいえ、あの男子生徒たちが噂していた内容は全て真実だ。実際に一ノ瀬は二人の男子生徒と同時に交際していた。一人は朝のホームルームが始まる前に別れを告げているので、今付き合っている相手は一人である。

一ノ瀬が複数の男子生徒と付き合うのには理由がある。

それは自分に無いものを得るためだった。

今まで付き合った男子生徒に共通点はほとんど無い。成績優秀な者や、スポーツ万能で運動部のキャプテンを務める者、将棋の有段者や、ロボットコンテストで優勝した者などもいた。顔が美形であるとか、スタイルが良いなどといったことは彼女の条件には当てはまらない。

一ノ瀬にとっての交際には、愛情というものが存在しなかった。

全て、相手が得ている何かを自分のモノにすることが第一優先だった。

一ノ瀬のやり口はこうだ。まず気になった相手の事を徹底的に調査し、自分の興味を示す事柄がある場合は更に念入りに調査する。そしてターゲットとして確定した後は、その対象が自分に興味を示すようにアプローチ

する。例えば授業で分からないところを（分からない振りをして）教えてもらったり、対象がクラスメイトと会話している間に入ったりする。そもそも彼女は容姿がよく、クラス委員長ということもあり既に有名人であることから、まず煙たがられることはない、という特性を生かしていた。

そういうことをくり返しているうちに、どこかのタイミングでアプローチが逆転する。

そこからは一ノ瀬は何もしない。

自らアプローチすることを辞めて、常に相手からの誘いを待つのだ。

やがて相手は気になってしかたがなくなり、所有欲を刺激された男子生徒は耐えきれず、一ノ瀬に告白するのである。

自分から告白するわけではなく、一方的に相手からの交際を受け入れてきたという自負があることから、一ノ瀬はあのような男子生徒たちの噂に対しても、まったく臆することがなかった。

そんな一ノ瀬がいま最も気になっている男子が、空条昇である。

空条は寡黙な男子生徒だった。

他人と関わろうとはせず関心も持たない。

心を閉ざしているように見えるが、学校を休むことはなかった。クラスでは窓側のいちばん後ろに座っている。成績は中の下くらいだが、授業中に先生に問題を出されても間違えるようなことは一度もなかった。

とにかく目立たない男子ではあるが、一部のコアな女子生徒からは人気があるようだった。彼の振る舞いは一見クールに見えないこともなく、他人を寄せ付けぬ雰囲気や、ミステリアスなイメージが女子の興味の的になっているらしい。

しかし一ノ瀬が空条に目を付けた理由はそんな一般的なものではなく、空条が何故あそこまで寡黙でいられるのか、その理由を知るためだった。それはまさに人間観察に近い衝動ではあるが、人が人を好きになる理由など千差万別で、人それぞれだ。そこに決まりきったルールなど存在しない。

一ノ瀬は早速、空条に対してアプローチをすることにした。既に下準備は済んでいるのか、先ほど終わったばかりの授業で使っていたノートを手にも、空条が座る席へと向かっていった。

「空条君、もしよかったらさっきの授業のノート、見せてもらえないかな？ 実は授業中にうとうとしちゃって、書き漏らしたところがあって」

なんともわざとらしい台詞ではあるが、これを違和感無く相手に伝える能力が一ノ瀬にはあった。話術というレベルではなく、もはや彼女自身から発せられる全ての要素がそれを適えていた。

「……いいよ」

空条は素直にノートを一ノ瀬に差し出した。普段人と接する事さえ避けようとする空条が、他人に自分のノートを見せるなど考えられない話だ。話しかけられても無視と相場が決まっている彼にとって、今回の反応は極めてレアだった。

「ありがとう。ごめんね」

一ノ瀬は決して高飛車な態度は出さない。謙虚な姿勢は敵を作りにくいことも熟知していた。

空条が座っている前の席が空いていたため、一ノ瀬はその席にある椅子に腰掛け、空条の机の上に自分のノートを広げて写し始めた。

普通の男子であれば、一ノ瀬が目の前でノートを取っている姿を見ただけでも心を奪われてしまうだろう。少し俯《うつむ》き加減の状態ですぐにペンを走らせるその仕草でさえ、どこか色気を感じさせる。艶《つや》っぽいわけではなく、静かで、清純さが漂うイメージだ。

ところが空条は、一ノ瀬をまじまじと見つめることもなく、すぐに席を立った。

「写し終わったら、ノート適当に置いていってくれればいいから」

空条はそう言って、教室を出て行ってしまった。

一ノ瀬は取り残される形となってしまったが、特に動揺している様子もなくノートを書き写していた。

だが、そこに書かれているのは空条のノートに書かれている内容とは程遠いものだった。

一ノ瀬はひたすら「ありえない」という文字を書きなぐっていた。

次の日の朝。一ノ瀬は登校中に空条のことについて考えていた。

「そういえば私、彼のこと何も知らない」

一ノ瀬のこれまでのやり口からすれば、まず対象のことをよく調べてからアプローチするのだが、今回は何故かいきなり相手との接触を試みてしまったのだった。いつもなら冷静に事を運ぶ彼女からすれば、ありえない状況だった。

一ノ瀬には多少なりとも自信があった。いきなりアプローチしたとしても、会話ができる程度の仲にはなれると思っていた。

だが、昨日のアプローチではまず進展など無かったと言えるだろう。

とはいえ、空条をよく知る者からすれば、彼のあの態度でさえも十分いままでとは違うと感じるのだが、一ノ瀬はそのことを知る由もなかった。

「まずは彼のことを調べることから始めなきゃ」

一ノ瀬は今日一日かけて、空条のことを調べることにしたのだった。

空条は独りでいることが多く、仲が良い友達がいるとも思えなかった。

そのため、一ノ瀬が空条のことを調べるのは、そう容易なことではなかった。

先生に話を聞き出すということも考えたが、そう簡単に他の生徒にプライバシーを漏らすようなことをするとは思えない。

一ノ瀬は独自の人脈ネットワークを駆使して徹底的に空条のことについて調べ上げた。

独自の人脈とは、もちろんこれまで付き合ってきた男子生徒達のことである。

二週間後、一ノ瀬の下には空条に関する有益な情報が集まってきていた。

おそらく、この学校にいる生徒のことで彼女が調べあげられない情報はないのかもしれない。

調べた結果わかったのは、空条は元々友達も多く、今のように孤独なタイプではなかったということだ。少なくとも小学校時代の彼は友達にも恵まれ、周囲には常に人が集まっていた。そのため独りでいることはほとんど無く、いつも笑顔で、楽しそうに過ごしていたのだという。

ところが中学に上がり、ある事件を切欠に彼は豹変《ひょうへん》してしまった

それは、星野明里《ほしのあかり》という女子生徒が、交通事故でこの世を去ってからだった。

星野は空条の幼馴染《おさななじみ》で、中学に上がっても一緒にいることが多かったという。小学生の頃はそれでもよかったのだが、中学生にもなると周りがそれを許さなかった。

つまり、嫉妬、あるいは憂さ晴らしの対象とされてしまったのである。

どちらかという、その被害は空条よりも星野のほうが大きかった。

空条が星野を守ろうとすればするほど、星野に対する嫌がらせは増えていった。

それは一向に収まる事は無かったという。

そんな事が続いて、星野は学校に顔を出さなくなった。

空条は何度も星野の家に足を運び、顔を合わせて話をした。

ところが、空条は学校での出来事ばかり話していたらしく、それが星野に対して良い影響を与えていなかった。

。

空条が楽しそうに学校での出来事について話せば話すほど、星野は自分のことを惨めに感じていったのだ。

「どうして私はこんなことになってしまったの？」

「どうして私だけこんな目にあっているの？」

「どうして空条君はこんなにも楽しそうなの？」

星野の頭の中には、常に「どうして？」が浮かぶようになっていった。

そして、星野が不登校になり二ヶ月が過ぎたあたりで、事態は急変した。

空条が、ひきこもりがちだった星野を外に連れ出し、買い物に出かけた先で、星野がトラックに轢《ひ》かれてしまったのである。すぐに救急車に運ばれ医師の処置を受けたが、星野の意識は二度と戻ることはなかった。

星野が亡くなったことは学校にも連絡が入った。

クラスにもしばらく動揺の空気が流れる。

この出来事を切欠に空条も学校に来なくなるのではないかと心配されていたが、意外なことに彼は事故があった次の日から何事もなく登校してきた。

ところがそこにいたのは今までの空条昇ではなく、まるで別人のようになっていたのだという。

彼は常に近寄りがたい雰囲気を放ち、人と関わらないようにして過ごすようになっていた。

このような境遇の人間の話を知れば、一般的にどう思うだろうか。

おそらく「可哀想」だとか「心配だ」と思うのだろう。

だが、一ノ瀬は違った。

「……ふふ」

一ノ瀬は恍惚《こうこつ》な笑みを浮かべていたのだった。

それから数日経ったある日、一ノ瀬は授業が終わった後に空条に声をかけた。

「空条君。少し話したい事があるのだけど、今日の放課後って時間空いてる？」

その場にいたクラスメイト達が一ノ瀬に意識を向ける。間違いなく興味の対象とされていた。空条に話しかける者など、今となっては一ノ瀬くらいしかいなかった。

「……空いてる」

「それじゃ、屋上で待ってるから」

このような会話を堂々とクラスの中で言ってみせる一ノ瀬もたいした度胸だが、対する空条もその表情は眉一つ動いていなかった。クラス中の男子生徒は空条に対し切望の眼差しを向けている中、女子生徒はすぐさま格好の暇つぶしとして会話のネタにしていた。

そうして放課後になり、一ノ瀬は空条に声をかけることなく直ぐさま屋上へ向かった。

夕陽で赤く染まる空の下、一ノ瀬は静かに佇んでいた。

屋上に流れる風にまかせて黒い髪が揺れている。

一ノ瀬は階段の扉を眺めていた。その扉が開かれるのを、ずっと待っていた。

そして、その扉が開かれる。

空条はとまどう様子もなく扉を閉めた後、一ノ瀬の傍までやってきた。

「……何の用だ？」

空条は一ノ瀬を見て言った。

「女子生徒が男子生徒を屋上に呼び出して話す内容って、だいたい想像がつくでしょ？」

一ノ瀬は思わせぶりの発言をして、空条の反応を待った。

ところが、一ノ瀬が望んでいたような展開にはならない。

空条は相変わらず表情一つ変えず、遠くの風景を眺めていた。

「ありがとう空条君。来てくれて嬉しい」

一ノ瀬は満面の笑みを空条に向けたが、空条はまったく見ていなかった。まだ外の景色を見ている。話を聞く気も無いようだった。

だが、一ノ瀬の次の言葉には、さすがの空条も無反応と言うわけにはいかなかった。

「星野さんのことがまだ忘れられないの？」

空条は目を見開いた状態で一ノ瀬のことを見た。「なぜ星野のことを知っている？」と口に出すよりも先に空条の表情がそれを告げていた。

「私、空条君に興味があって、悪いとは思ったけど色々調べさせてもらったの。そしたら昔の空条君と今の空条君って全く別人のように違うから、ますます興味深くなって更に調べたら、星野明里さんのことを知ってしまったの」

一ノ瀬の話聞いていた空条の表情がみるみる変わっていく。

この変貌《へんぼう》ぶりを見て、一ノ瀬は内心たまらない気分になっていた。

多くの生徒には知られていない秘密を、自分が知っているということに快楽を感じ始めているのだった。

「お前には関係ない。これ以上、俺に関わるな」

空条のこの言葉も、一ノ瀬は想定内だった。真っ先に拒絶されると思っていた。だからその対策も事前に考えてあった。

「私は、空条君の力になりたいの。空条君が本当は明るくて人を思いやれる人だって、私にはわかるもの。また昔のようにたくさんの仲間に囲まれて、楽しい時間を過ごしたいって思っている。でも自分の心が本当の自分を押しさえ込んでしまっているだけ。私はその抑圧から空条君を解放してあげたい」

それはまるで、宗教団体の教祖、又は果てしない修行の果てに悟りの境地に至った修行僧の言葉のように、人の心の中にすっと入り込むような言葉だった。

空条からすれば、一ノ瀬の言葉は全くもってお節介極まりないものだが、意外なことに空条は一ノ瀬の話最後まで聞いていた。

「私なら、受け止められるよ」

決定的な言葉になるはずだった。

この言葉で、空条はほぼ間違いなく一ノ瀬に心を開き、全てを委《ゆだ》ねてしまうはずだった。

ところが空条は一ノ瀬の言葉を飲み込むことなく、その場を離れてしまった。一ノ瀬の言葉に応じることなく、屋上から去っていった。

それでも、一ノ瀬は特に落胆することなく満足げな表情を浮かべていた。一から百まで、全てを話してしまうことは簡単だった。だが、それではあまりにも胡散《うさん》臭くなってしまう。言葉が多ければ多いほど、相手は拒絶してしまうものだ。出来るだけ少ない言葉で、相手の心を鷲掴《わしづか》みにすることが必要だった。そういう意味では、今のやりとりで十分の成果を得ていると一ノ瀬は感じていた。

「……ふふ、空条君のあんな表情。私しか見た事ないんだらうな」

夜の闇が緋色の空を塗り替える。

目を見開き慟哭《どうこく》を晒《さら》したような空条の表情を思い出しながら、一ノ瀬は心の底からわき上がって来るどす黒い感情の存在を感じていた。

それからは時間の問題だと、一ノ瀬は思っていた。

あの屋上での出来事から、空条はもう自分のことを意識せずにはいられなくなっていると確信していた。後は空条が声をかけてくるまで、しばらく待つだけだった。

これまで一ノ瀬が行ってきた通りの展開になったわけだが、唯一違う点をあげるとすれば、一ノ瀬があまりにも妄執《もうしゅう》に囚《とら》われている事だった。一ノ瀬は常に余裕をもって行動するタイプの間人だった。身も心も余裕がなければ、いざと言う時に対処できないということをよく理解していた。だが、今の彼女はあまりにも盲目的で、空条が自分に助けを請い、縋《すが》ってくることを心待ちにしているのだ。

そうして、数日経ったある日のこと、空条は一ノ瀬を学校の近くにある公園に呼び出した。

「空条君から誘ってくれるなんて嬉しいな」

一ノ瀬はそう言いながらも、この展開はすでに想定済みなので、驚きも感動もあるはずもなかった。

彼女が考えているのは、ようやく空条が自分に助けを求めて来た、という安堵《あんど》の気持ちだけだった。

。

「それで、今日は私に何の用なの？」

白々しく言いながらも、一ノ瀬は一刻も早くこの先の展開を迎えたくて仕方が無かった。「俺にはお前が必要だ」という空条の言葉を早く聞きたかったのだ。

ところが、空条は思いも寄らぬ言葉を発した。

「もう……手遅れなんだ」

「え？」

一ノ瀬は空条の言葉をすぐに理解することができなかったが、「手遅れ」とは、もう自分の心が限界を越えているということを意味していると理解し、助けを求めているのだと判断した。

「大丈夫。全て私に任せて。私に身も心も預けてくれればいから」

一ノ瀬は恍惚《こうこつ》な表情を浮かべている。

ところが空条は、一ノ瀬のことを見てなかった。むしろ、一ノ瀬の背後、又は身体全身を纏う何かをじっと見つめていた。

「違う。俺の事じゃない。手遅れなのは――」

空条が最後まで言葉を発することなく、ソレは突然訪れた。

「――え」

暴走したトラックが公園のフェンスを突き破り、一ノ瀬に向かって突進してきた。

一ノ瀬は身動き一つとることができなかった。

空条の目の前を死の暴風が吹き去る。

耳の鼓膜を劈《つんざ》くような衝撃音の後に響き渡ったのは、近くにいた人の悲鳴。

さっきまで自分の目の前にいたはずの人の面影などなく、

その公園に残ったのは、もはや災害とも言える惨事《さんじ》の後だった。

そう――一ノ瀬は空条の目の前でトラックに轢《ひ》かれたのだ。

星野明里と同じように。

「……うう」

空条は多くの人間の目に触れる前に、この場から立ち去る必要があった。

面倒な事に巻き込まれるわけにはいかない理由が彼にはあった。

“ヤミ祓い”と言われる彼らの存在は、世の中には全く認知されていない。

いかなる存在にも、自分を悟られるわけには行かなかった。

彼は人が無意識に抱える業や妄執の類いを視覚することができる。

学校の屋上で空条が一ノ瀬を見て目を見開いたのは、ソレを視覚した所為だった。

やがてソレは人の身を完全に覆い尽くし、死に至らしめる。

それは多くの場合、外的な作用——つまり事故、あるいは災害、一般的には不幸な出来事として発現される。

実際のところ、彼らはそういった人に取り付いたヤミを根本的に祓うわけではない。

彼らは対象者の死期を早めてあげることで、他者を巻き込むことなく、更には大きな災害や惨事に発展するまえに処置するのである。

祓うと言えは聞こえはいいが、要するに死神と言われる人の魂を狩るものの所業に近い。ちなみに、空条が己をヤミ祓いとして認知したのは、星野明里の事故のときが最初だった。あの時の星野も、既に真っ黒なヤミに囚われており、空条の目にはもはや星野を人の姿として見る事が出来ないレベルになっていた。

「……やったよ明里。また一人、俺は——」

そうして空条は思うのだった。

星野明里の時と同じように、これはヤミを孕んでしまった者たちへの救済なのだ

—————ヤミ祓い。了。

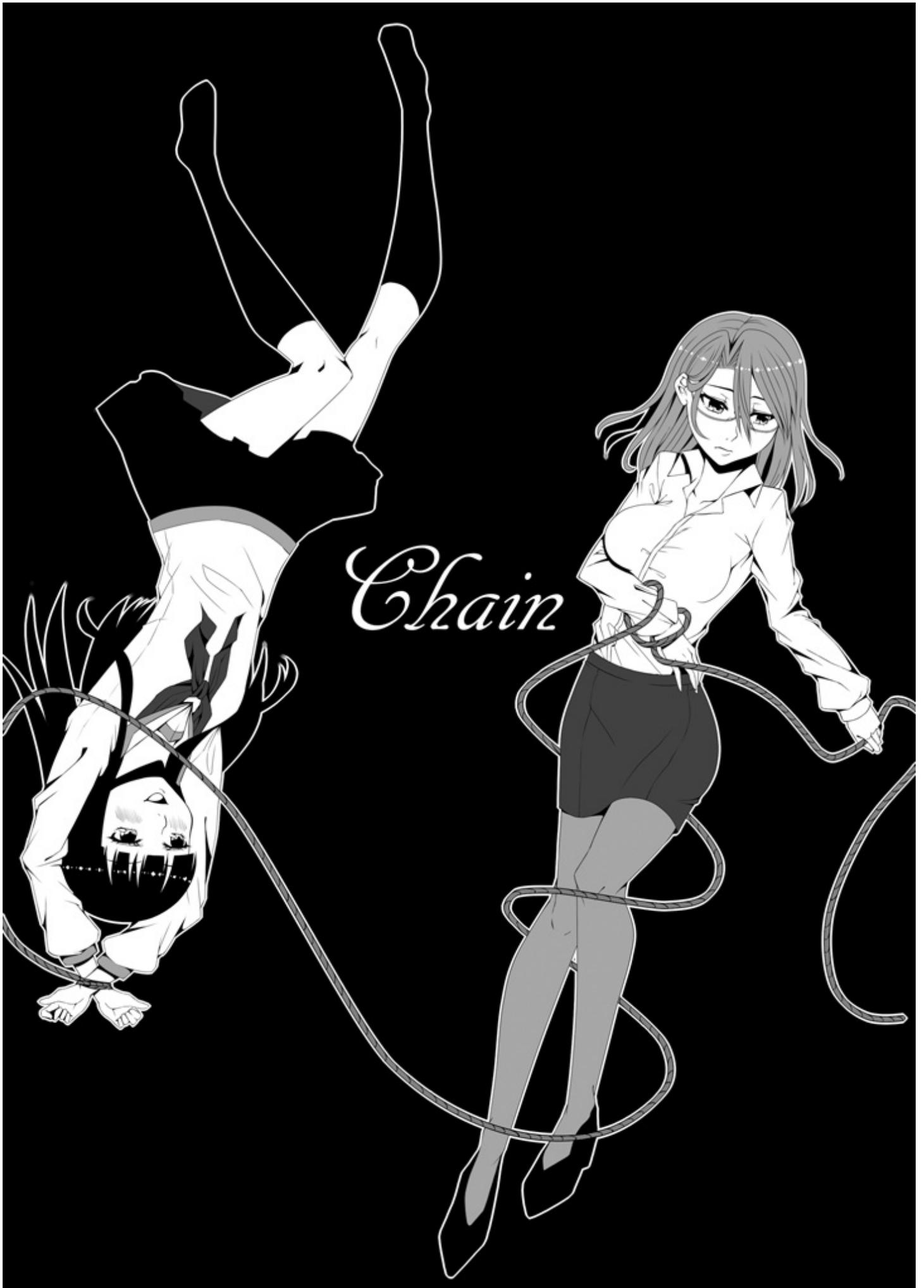
今でも覚えている――透き通るような白い肌。

下卑た笑い声。

苦痛に満ちた呻き。

恐怖に怯えた顔。

そして、鮮やかな、紅。



Chain

自分が人間として壊れている——わたしがそのことを理解したのは、いつのことだったろうか。

少なくとも物心ついたときにはもう、自分がそうであることには気付いていた。それより前のことで、断片的に覚えているのは、子供の戯れ、おままごとの延長線——お医者さんごっこの時、幼馴染みであった彼女の身体に触れた、あの時に抱いた熱病にも似た感情。

それから今に至るまでというものの、わたしは自分が『壊れて』いることを隠したまま、社会と折り合いをつけながら生きてきた。少なくともわたしはそのつもりでいる。

わたしは『普通』に高校、そして大学を出て、無事に就職も果たした。社会人として生活しながら、幼馴染みの結婚式には友人代表としてスピーチもこなしたし、ウェディングドレスを着た彼女を見て、涙を流したりもした。もっとも、それは他の参列者や彼女が流したものとは意味が異なっていたが。

もし、何か言及される点があるとすれば、それはわたし自身に浮いた話が一つもないことだが、今日び恋人のいない女性は珍しいことではないし、両親を早くに亡くしており親戚も疎遠なわたしに、それを非難するような人間は、今のところいない。

だから、わたしと世界のこの歪んだ関係は、わたしが墓に埋まるまで続くのだろう——そう思っていた。……しかし。

「……どうして、こんな」

後悔をため息で押し流しながら、わたしは改めて目の前にあるそれを見下ろした。

そこに横たわっているのは、子供の頃持っていた着せ替え人形をそのまま大きくしたような少女。綺麗で真っ直ぐに伸びた髪、染みどころかニキビーつない整った顔——もちろんそれは人形などではない。その証に、その頬にはうっすらと赤みがさしており、その制服の胸元は定期的に上下している。

「ううん……」

苦しそうな寝息を吐きながら少女は寝返りを打ち、その腕に繋がれた縄が耳障りな軋みを上げた。

わたしは少女のことをよく知っていた。彼女の名前が梢《こずえ》であること、また彼女がどこに住んでいるのか、その家族構成、学校での成績や交友関係に至るまで、知り得る限りの全てをわたしは調べていた。

……しかし、それと彼女がここにいることには関係はない。わたし自身、彼女をここに連れてきてしまったという事実には戸惑いを覚えていた。

わたしは彼女の寝顔をじっと見つめる。果たして彼女を巻き込む必要などあったのだろうか……。そうだ、今ならまだ取り返しがつく。今すぐ縄を解いて、彼女を起こし、すぐに家に帰す。そうすれば大事にはならず済むだろう——

しかし、わたしが悩んでいたそのわずか数瞬のうちに、彼女のその長い睫《まつげ》がゆっくりと持ち上がっていく。わたしはただそのさまを呆然と見ていることしかできなかった。

彼女は、数回目を瞬かせると、その汚れ一つない眼差しをわたしに向け、

「……よかった」

と、だけ呟き、そして嬉しそうに笑みを浮かべる。

——途端、えもいわれぬ恐怖を覚えたわたしは、慌てて部屋から飛び出し、そのまま後ろ手に

ドアを閉めた。

(今は、一体――)

そのままドアにもたれかかるように座り込みながら、わたしは少女の言葉の意味をしばらく考えていた。

朝になっても、残念ながら現実は何も変わっていなかった。

いっそ夢ならばいいと思い、そして実際、あれは夢だったのだと思い込もうとした。だが、一緒に持ってきたまま玄関に放置していた彼女の鞆が、わたしを夢の中から現実へと引き戻した。

今のわたしの頭の中は、これから彼女を一体どうするべきか、それだけで一杯だった。

「おはようございます、二ノ宮先生」

はっとして顔を上げると、人が良いことで評判の教頭が、いつものように禿上がった頭を光らせながら、にこにこ微笑みを浮かべていた。

「……ええ、おはようございます」

「おや先生、どうかされましたかな？ 顔色が優れないようですが――」

そんなことはないですよ、と受け流しながら、わたしは教頭の洞察力に少し感心した。人生経験の長さだろうか、それとも持って生まれた感覚だろうか。どちらもわたしにはないもので、もしわたしがどちらかだけでも持っていたのならば――やめよう、それはわたしが男だったらと妄想するのと同じく、無意味なことだ。

「もしかして、彼氏と何かありましたかな？」

「教頭先生、セクハラですよーそれ」

「おっと、これは失礼。ははは」

他の教師のツッコミを受けて笑う教頭、それに釣られて笑う同僚たち――そして、わたしもそれに合わせる。教頭の視線が、わたしの胸元に注がれているのを感じながら。

それを別に汚らわしい、とは思わない。一皮剥けばわたしもまた、同じ穴の貉《むじな》だということはよく理解しているつもりだ。

ただ、ここが女子校であるという性質上、教頭のそれとは違い、わたしのそれはどうあっても隠し通さねばならない。少なくとも、あの時、彼女に抱いたような感情を表に出してはいけない。

「……そういえば、教頭。イチカワさん、今日休みだそうです。先ほど連絡が」

「おおそうか、ありがとう。体調でも崩したんだらうかねえ……さ、では、職員会議を始めましょうか」

話し出す教頭の声にぼんやりと耳を傾けながら、わたしは再び思考の海へと意識を沈めた。

両手にビニール袋を抱えて、わたしは家路を急いでいた。

昼食を取っている時に、ふと彼女に食事を与えていないことを思い出したのだが、流石に午後の授業があるのに学校を抜け出すわけにもいかず、今日は仕事を早く切り上げて帰宅することにした。流石に一日食事を抜いたぐらいで死ぬようなことはないはずだが、暴れられたり叫び声を上げられたりしたら面倒だ。

それにしても、とわたしは辺りを見回す。最近の仕事を終えて帰宅するのが専ら日が沈んでか

らだったので、こうして黄昏色に包まれた街を歩くのは、懐かしくも、新鮮にも感じられた。たまには他の教師がそうするように、見回りと称して散歩をするのもいいかもしれない。

しかし、わたしのそうした感傷は、家に着いた途端打ち砕かれた。

窓から明かりが漏れている――それを見たわたしは、まず家の鍵を確認する。激しい鼓動を抑え込みながら、細心の注意を払って、ゆっくりとドアを引く。すぐに何かに引っかかるような感触がして、ドアはそれ以上動かない。ということは鍵はかかっている……ならば何故、キッチンに明かりがついているのか。

この家の鍵はわたしの持つ一本だけ。それ以外の鍵は、両親が死んだときに処分した。鍵穴を見てみるが、特に鍵をこじ開けられた様子はない。ならば他の窓から入られたのか――いや、進入方法はどうでもいい。問題なのは……彼女を見られたのかどうか、その一点に尽きる。

靴は目に付かないところに隠してあるし、痕跡もほとんど残していないはず。だから後は二階のあの部屋に入られたかどうか。もしあの部屋にいる、腕を縛られたままの彼女を見られたら――冷たい汗が額を伝い、鼓動がさらに早くなる。

わたしは極力音を立てないように鍵を開け、玄関を開く。玄関に靴はなく、わたしが今朝出ていったときのまま。わたしはゆっくりと靴を脱ぐと、手近な場所にあった空の花瓶を手に取り、明かりの漏れるキッチンの扉を少しだけ開けた。そして、入ってすぐのリビングに誰もいないことを確認すると部屋の中へ潜り込む。

「～♪」

鼻歌が聞こえる。どうやら、キッチンに誰がいるらしい。

我が家のキッチンは、いわゆるダイニングキッチンだった。入ってすぐにリビング、そして食事用のテーブルがあり、キッチンカウンターを挟んで、その向こうの壁側にコンロやシンクがある。つまり、料理をしているのであれば、こちらに背を向けることになる。

どういつもりかは知らないが、これはチャンスだ――そう思ったわたしは、カウンターからその人物を覗き込み、

「!？」

思わず花瓶を取り落としそうになった。

キッチンで料理をしていたのは、一人の少女だった。時折、楽しそうに身体を揺らしながら、何かを作っているようにも見える。しかし、彼女がここにいるはずはなかった。何故ならば、彼女は――

「……一体何を、しているの？」

思わずわたしがそう問いかけると、彼女は一瞬肩を震わせ、そして小さく息を吐いた。そして、ゆっくりと振り返ると、

「びっくりしましたわ。今ちょうど、夕ご飯を作っていたところなんですよ」

そう言いながら少女――梢は、振り返るとにこり笑う。

「お帰りなさい、先生」

「いただきます。……ん～、美味しい。よかった、今日は美味しくできましたわ」

梢はハンバーグを口に含むと、満足そうに頷いてみせた。流れるような手つきでナイフとフォークを操るその様は、彼女がそれなりに躡を受けてきたのであろうことを伺わせる。

「どうしたんです、先生？ 早く食べないと冷めてしまいますよ」

そう言って梢は首を傾げ、食卓に着いたまま呆然としているわたしをじっと見つめた。

わたしの目の前には、普段自分で作るより豪勢な料理がずらりと並んでいる。料理から立ち上る美味しそうな香りで、反射的に唾液が滲み出てくる。だが、今のわたしはそれにおいそれと口をつけようという気にはなれなかった。

「……どうやって」

「え？」

「どうやって、あの縄を解いたの？」

「ああ、そのことですの」

そう言って、梢は自分の腕を掲げて見せる。その白磁のような白い腕には、赤く縄が擦れた痕が痛々しく刻まれている。しかしそれは、彼女の美しさを損なっていない。むしろそうしたアンバランスさが、かえって彼女の魅力を引き立てているようにも感じる。

「わたし、縄抜けには慣れてるんですよ。だから、これぐらいの縄なら昨日の夜のうちに解いてしまっていました。できれば先生が帰ってくるまで待とうとも思ったんですけど、お恥ずかしながらお腹が空いてしまって……あ、もしかして気に障りました？ でしたらごめんなさい、先生。でも、帰ってきたらご飯があるのっていいでしょう？ 皆さん、喜ばれるんですよ？。それにこのハンバーグ、結構自信作なんですよ。ちゃんと食べてくださいね。もし何でしたら、あーんして差し上げてもー」

まるで楽しさに我を忘れてはしゃぐ子供のように、早口でまくし立てる梢をわたしは疑いの眼差しで見つめる。

縄抜けに慣れてる？ 冗談にしては、あまりに嘘臭い。仮にもし本当に彼女がそんなものに慣れ親しんでいるのなら、どうして彼女はあの時――

(……いいえ、それはどうでもいいことだわ)

わたしはゆっくりと首を振る。きっと、梢はカッターか何かを持っていて、それで縄を解いたのだろう。必要ならその有無は後で調べればいい。むしろ今気にすべきなのは――

「どうして、逃げなかったの？」

束縛から逃れることができたのなら、逃げることを考えるはずだ。にもかかわらず、彼女はここに残ることを選び、あまつさえわたしを出迎えるようなことまでする。その意図が、わたしにはわからなかった。

「……ふふ、さて、どうしてでしょう？」

梢はわたしの問いには答えず、含み笑いを浮かべると、困惑を深めるわたしを余所に、ゆっくりと立ち上がった。

「さて、ごちそうさまでした。洗い物はすみませんが、お願いしますね」

「？ それは構わないけど――」

梢はわたしの前に昨日わたしが彼女の手を縛ったロープを置き、そして呆然とするわたしの前に、にこりと微笑みながら自分の両手を差し出した。

「さ、今度はしっかりと縛ってくださいね」

わたしは自分の耳を疑った。どういう手順にせよ一度脱けだした縄に、再び縛られたいと願うなど本当にどうかしている。

「……どういうつもり？」

「あら？ もう縛らなくてもいいんですか？ わたしがもし逃げ出したら、どうなるのかは先生がよくおわかりですよ。明日の三面記事がどうなるか……」

「……………」

仮に、今から彼女が警察に駆け込んだとして、それを狂言と捉えられるかどうかは、五分五分だろうと思った。ただ一点、彼女の腕に残るその縄の痕は、警察が動くかどうかの決め手になる可能性が高い。そしてそれはわたし……というよりは、わたしの目的にとって大きな障害になりかねない。

ただでさえ、失敗をしたばかりなのだ。すべてが明るみになり、彼らに警戒される前に、全てを終えなければならない。

「さあ、どうしますか？」

彼女は沈黙したわたしの表情を見て、楽しむように笑う。……確かに彼女の言う通り、わたしに選択肢はないようだ。しかし、ただ言うがままになる訳にもいかない。

「……少し待ちなさい」

わたしは彼女をその場に残すと風呂場まで行き、白いタオルを一枚取って戻ってきた。

「？」

わたしは興味深そうに見る梢の腕にまずタオルを当て、そしてその上から彼女の手を昨日のように縛った。こうすれば昨日よりは痕が残り難いはずだ。そして、この痕さえなくなってしまう――

「ふふ、優しいんですね。先生」

「……勘違いしないでね。痕が残ると色々と面倒なだけよ。……さ、行くわよ」

「はい。……ふふふっ」

嬉しそうに自分の腕をまじまじと見る梢を連れて、昨日と同じ部屋に行くと、わたしは縄の反対側をきつく柱に結びつけた。

「……これで満足かしら」

「はい♪ それではおやすみなさいませ、先生」

何故か最後まで楽しそうな彼女を無視して、わたしは扉を閉めた。

「どうなっているの、これは――」

わたしは誰にもなくぼそりと呟く。当たり前だが、わたしの他に誰もいない家の中からは、返事が返ってくることはなかった。

「おかえりなさい、先生」

玄関を開けるなりわたしを出迎えた梢を見て、わたしは大きく息を吐き出した。

(……今日も駄目だったか)

あれから数日が過ぎたが、梢は毎日わたしが帰るまでに縄を解き、わたしの帰りを迎え続けていた。もちろん結び方をきつくしたり、ネットで調べた解け難いとされる結び方を試してみたりもしたのだが、今のところ効果は上がっていない。何か道具を使っているのか、と彼女自身や部屋を調べてみたものの、それらしき物はずいに見つからなかった。

「ふふ、だから慣れてるって言ったではありませんか。ああでも、流石に鉄の鎖とかは難しいですけれど――」

困惑するわたしに向けて、彼女は楽しそうに笑う。

どうしても逃げ出されたくないならばそうしろと誘っているのだろうか……しかし、仮にそうだとすると、鉄鎖のように処分し辛く、足がつきそうな物を使うわけにはいかない。

(それに、そんなことをしてしまえば――)

わたしも、アレと同じになってしまう。それだけは、認めるわけにはいかなかった。

「じゃあ先生、そろそろ――」

「その前に、風呂へ入りなさい」

わたしより早く食事を終え、いつものように両腕を差し出す彼女に、わたしは風呂場を指差しながら告げる。流石に二日ほどすると臭いが鼻につくようになってきたので、風呂に入るように言うと、彼女はおとなしくそれに従った。

「ああ、そうでしたわね。ではお先に」

風呂場に駆けてゆく梢を見送り、わたしは大きくため息をつき、少し冷めかけた食事をとる。最初こそ何か入っているのではないかと疑ったが、今ではもう気にせずに食べている。どうやら、彼女はここから逃げ出そうという気配も、わたしをどうにかしようという考えもないように思えた。

であるならば、彼女の目的は一体何なのかという疑問は残るのだが――わたしは一先ず、それについては後回しにしていた。それよりも、わたしには優先すべきことがある。その支障にならないうちは、放置していてもいいと考えていた。

「先生～、ありがとうございましたわ」

「……今行くわ」

相変わらず早い湯浴みだと思いながら、わたしが脱衣所に入ると、梢は身体から水を滴らせながらわたしが来るのを待っていた。

わざと薄暗くした脱衣所の中、わたしは無言で彼女の肌の上で水滴を清潔なタオルで拭ってやり、その綺麗な髪を櫛で梳いてやりながら、丁寧にドライヤーをかける。

彼女との生活で最も驚いたのは、彼女が自分では服が着れないことだった。料理や家事など、それ以外のことは一通りできるのに、それだけは何故かできない。いや、しようとしないのだ。

裸で歩き回られたりして風邪をひかれても困る。だから替えの下着と服を着せるのはわたしが

しなければならなかった。

「はい。いいわよ」

「ありがとうございます。……ところで、ねえ先生」

梢は少女とは思えない口調で囁きながら、わたしの身体の線をなぞるように触れる。顔から肩、腰から臀部へと延びたところで、わたしは梢の手を払いのけると、鋭い視線を向ける。

「馬鹿なことはやめなさい」

これまでも何度か、そういう雰囲気になったことはある。けれどわたしは、それを拒み続けてきた。

わたしは既に『壊れて』いる人間だし、確かに彼女に何か劣情のようなものを催したことがないとは言わない。けれど、だからこそ越えてはいけない一線があることを知っている。越えていないからこそ、わたしはまだこちら側にいられる。一度たりとも越えてしまえば、それはもう『わたし』ではなく、ただの動物になってしまう。

「もう、先生ったら奥手なんですから」

「……わたしは教師である限り、教え子に手を出したりしないわ」

「ふうん。……じゃあ、わたしが生徒じゃなかったら手を出してたってこと？」

わたしが彼女を無言で睨みつけると、梢は少しおどけた様子で、

「冗談ですよ、先生。本気にしました？」

そう言って、梢は笑みを張り付かせた。

彼女に本当のことを告げたら、どういう反応をするだろうか……いいや、もしかしたら彼女は、もうどこかで知っているのかもしれない。

いずれにせよ、このままの状態がいつまでも続くはずがないことはわかっている。

けれどわたしは、心のどこかでこの生活が続くことを望む自分がいることに、薄々気づき始めていた。

そして、その時はいつも唐突にやってくる。

「それでは次の議題ですが、最近欠席を続ける生徒についてです。その理由は様々ですが、家出や病気といったものから、不登校のような――」

珍しく、職員会議は暗い雰囲気に包まれていた。というのも、普段なら自ら和ませようと試みる教頭自ら、気分の悪さを振りまいているから当然ではあった。

人のいい笑顔は形を潜め、何かにイライラした様子で、頬杖をついて職員をねめまわすように見回している。八つ当たりこそないものの、時間の問題だろうとは思われた。

「……人間万事塞翁が馬、か」

わたしは誰にも聞こえないようにぼそりと呟いた。

今の教頭の気持ちや、わたしには手にとるようにはわかる。……わたしもあの時、同じ気持ちだった。まるで大切なコレクションの一つを、他人によって喪失させられたことによる何者かへの憎しみ――あるいは本人にしかわからない、不安。

「欠席といえはーイチカワさん、今日もお休みなんですよ。教頭、理由は知りませんか」

「いや、知らん。わたしに聞かずに、家に聞いてくれたまえ」

苛立ちに満ちた教頭の声聞きながら、わたしは一人ほくそ笑んだ。

「……もう、終わりにしましょう」

いつものように腕を差し出す彼女に向けて、わたしはそう切り出した。それは彼女をここに連れてきてから、二週間が過ぎ経ったある夜のことだった。

「終わりにするって……何をですか？」

「この、監禁ごっこのことよ」

あくまでとぼけるつもりの梢に、わたしははっきりと告げる。傍目からはどう見えるかは知らないが、わたしからすれば間違いなくこれは『ごっこ遊び』でしかない。わたしは最初から彼女を監禁するつもりはなかったし、彼女に至ってはここから逃げようというつもりすらない。わたし達がしているのは、風変わりな同居生活でしかない。

「ごっこって……先生ったら、これは遊びではありませんわ」

両手を差し出したまま、むっとしたように言う梢。その両腕は、以前のような白磁の肌を取り戻している。

「いいえ、ただのお遊びだわ。わたしも、あなたも——ただ役割を演じているだけ。けどもうそれは終わり。あなたは、あなたの場所に帰りなさい」

梢はゆっくりと首を振ると、悲しそうな瞳でわたしを見つめる。

「そうではありませんわ、先生。……それに、わたしには帰る場所なんて最初からありませんよ」

「？ あるじゃない、あなたには。帰るべき家が——」

「あの家は場所ではありませんわ。あれはただの入れ物なだけです……『人形』を入れておくための」

「……人形」

「はい」

梢は小さく頷くと、自分が着ていたブラウスのボタンに手をかける。

「そういえば、先生は一度も触れてはくれませんでしたね」

寂しそうな顔をしながら、梢はゆっくりとその服をはだけてゆく。上着を脱ぐと、次はスカートがすたとんと床に落ちる。そして下着を脱ぎ去り露わになる彼女の素肌、そしてそこに薄っすらと残る縄や鞭によるもの、あるいはそれ以外のものによる、様々な傷や痕。けれどわたしはそれを見ても特に驚くことはなく、ただやはり、と思っただけだった。

「その様子だと、先生は知っていたんですわね。わたしが、あそこでどういう扱いを受けていたのか」

「……確信はなかったわ」

ずっと昔からわたしは知っていた。あの家、あの場所で、一体何が行われているのかを。そして一体誰が、それを行っているというのかを。忘れたくても忘れられない。今でもあの頃のことは夢に見るし、ふとした時に幻聴が聞こえることもある。

「わたしはあらゆる手で連中を調べていた。一度だって忘れたことはなかったわ……あの時の『思い出』を」

すべてを知ったわたしは、少しずつ行動を始めた。一人——また一人、昔の生徒だと名乗り、近づいて、そして消していった。

「——あと、一人だったのよ。あと一人で、すべてが終わる」

そしてあの日、すべてを終わらせるはずだった。あの時、彼女を穢した人間は、アイツで最後だった。

「だけど生憎、あの家にはあなたがいただけだった。しばらく待ったけど、アイツが来るような気配はない。だからわたしは、あなたをここに連れて来ることにした」

せめてアイツにも同じ感情を味あわせてやろう、そのときは純粋にそう思った。

「……本当なら、あの部屋はあなたのためのものではないのよ。あいつを——あいつらを、拷問するための場所」

縄も、隠してあったそれ以外の器具も、すべてはそのために揃えた。けれど、使ったのは数えるほどしかなかったが。

「気づいていましたわ。だってあの部屋、血の臭いがしましたもの」

「……そう」

丁寧に掃除をしたつもりだったが、それでも染み付いた穢れは落ちないものらしい。まるで、わたし自身のように。

「だけどいざ連れて来て、わたしは後悔した。これでは、わたしも連中と同じではないか、と。だから——」

わたしは梢を真っ直ぐに見据えて、言う。

「もう、終わりにしましょう。あなたにはこれ以上、関係ないことだわ——あなたが少しだけ黙ってくれていれば、わたしは——」

けれど、梢はそうではないといった様子で、勢いよく首を振る。

「いいえ、わたしはもう無関係ではありませんわ。……それに、わたし実は見ていましたの。あれは一ヶ月前の夜でしたわ——先生が、おじさまを斬り捨てるどころ」

「!!」

確かにその頃、わたしは連中の一人を始末した。本来は眠らせるはずが上手くいかず、その場で始末せざるを得なかったため、慌てて撤収する羽目になったのだが——

「……まさか、あなた」

「はい、わたしもおりましたのよ。あの時、あの場所に。……当然でしょう？ わたしは、あの人たちの『人形』なのですから」

凍りつくわたしとは対照的に、梢はくすりと笑う。

「ああ、あの時の先生、綺麗でしたわ——真っ赤な血に塗れて、それが月明かりに照らされて、宝石みたいに輝いて。初めてでした……わたし、初めて欲しいと思いましたの。あんな人に、愛されたいって——だからあの日、先生に拉致されたと知って、わたしはこの上ない喜びを感じたのですわ」

頬を染め、恍惚の表情を浮かべる梢。その姿は年相応の少女でも、等身大の人形でもなく、まるで何かに憑かれたヒトガタのように見えた。

「さあどうします、先生。わたしを愛してくれますか？ それとも、わたしを殺しますか？ ……ええ、それも素敵ですわね。先生の手で首を綺麗に裂かれて、わたしの中から飛び出した鮮血が先生の身体を濡らす——それでわたしは、永遠に先生の一部になりますの」

「——わたしは」

「ですけど、わたしを逃すという選択肢だけは認めませんわ！ ……もしそれを先生が選ぶというのなら」

梢はテーブルから食器のナイフを手にとると、それをそのままわたしの首元に突きつけた。

「わたしが今ここで先生を殺しますわ。……そしてその血の海の中にわたしも沈みましょう」

「何故？ あなたは、どうして——」

「いやですわ、先生。好きとは、そういうものではありませんか。相手を自分だけのものにした——先生だって、そうだったのでしょうか？」

「……だけど——」

わたしはただ悲しかった。目の前のこの少女が、ずっと前に壊れてしまったわたしのような人間とは違って、まだ治ることができて、真っ当に生きるべき彼女が、わたしのような人間を好きになってしまったという、その事が。

「泣いてくださるのですか？ ふふ、お優しいんですね、先生は」

くすりと微笑むと、梢はわたしの頭を抱えて、自分の身体へと引き寄せる。

「——大丈夫ですわ、先生。わたしにいい考えがありますの。わたし達みんなが幸せになれる、とっても素敵な方法が——」

その甘い言葉は、わたしの脳髓を痺れさせながら、じわりじわりとしみこんでゆく。

「だからこれからも——わたしを愛して下さい。たったそれだけで、いいのですわ」

「梢、あなたは——」

「さあ、先生。わたしを縛ってくださいませ？」

両腕を掲げながら少女は笑う——その瞳に、深い闇をたたえたまま。

Epilogue

「……教頭先生」

声をかけると、彼はびくりと肩を震わせて振り返った。けれどそれがわたしであることを知るなり、期待はずれといった様子で肩を落とした。

「な、なんだ、君かね……」

普段とまったく様子の違う教頭の姿を見て、わたしはくすりと笑った。

——わたしは壊れている。それを自覚したのは、いつのことだったろう。

「んん？ もしかして君なのか？ わたしを呼び出したのは」

「はい、実はそうなんです」

「なんだ、そうなのか。一体、何の用かね。こんな時間に、しかもこんなところに呼び出すなんて」

「ええ……少し、生徒のことでご相談したいことがありますて」

——わたしのもっとも古い記憶は、彼女の透き通るような白い肌、汚らわしい笑い声、苦痛に満ちた呻き、鮮血——あれ、何かを忘れていたような気がする。

……そう正確には、あの時何が起こったのかをわたしは覚えていない。ただ気づいた時には、血に塗れたわたしは彼女の手を掴んで逃げ出していた。

「生徒のこと？ それなら学校でもいいだろう」

「いいえ、学校ではいけないのです、教頭。生徒といっても——もう、十年ほど前のことですから。……わたしのこと、覚えていらっしゃるでしょうか、教頭——いいえ、市川先生」

「な、君は——まさか！？」

彼はゆっくりと後ずさり、そして壁にぶつかって足を止めた。

「はい、かつてはお世話になりました、遥《はるか》です。わたし、ずっとお礼がしたくて——やっと願いが叶いましたわ」

わたしは懐からそれを抜き放つと、大きく振りかぶった。刀身が、月光を浴びてきらりと光り輝く。

「た、頼む、助けてくれ、わたしは——」

そうだ、思い出した。忘れていたもう一つ、それは恐怖に満ちた顔——そしてそれは、目の前にあるそれと瓜二つだった。

「それでは先生——さようなら」

わたしが腕を閃かせると、その人の形をしたものは首に大きな口を開けると、そのまま糸の切れた人形のように動かなくなった。

遅れて噴き出した粘つく液体を浴びながら、けれど記憶の中にある紅は、こんなに淀んだ色ではなかったなと思った。

「ああ……素敵ですわ、先生——」

恍惚とした誰かの声を聴きながら、わたしはゆっくりとそれに背を向けた。

「……はい、これでいいわよ」

「ありがとうございます、先生」

制服を着せてやると、彼女は均整のとれた顔でにこりと笑う。

「ふふ、どうですか、先生。似合います？」

わたしの目の前でぐるりと回る梢。似合うも何も、制服は以前のままではないか——そう言いかけたわたしは、彼女が見せたいのはそれではないことに気付く。

梢の首元で、真新しい黒いチョーカーがきらりと輝いていた。それは腕を縛る縄の代わりに、彼女の身を縛る鎖だった。

ここで暮らすと言う彼女に、学校へは行くようにと言ったところ、彼女は条件としてわたしに代替となるものを望んだ。それがそのチョーカーだった。

「うふふ、これでずっと一緒ですわね。先生」

これをつけていると、先生に縛られているような気がして安心できる——とは彼女の弁だが、それで彼女が愛されると感じているのなら、それでもいいだろう。

「……どうして、人は一人じゃいられないのかしらね」

人は常に誰かに縛られ、縛り、束縛し、干渉し合い、されたがる。まるで、そうしなければ孤独に押しつぶされてしまうともいうように。

目を伏せるわたしに、梢は「当たり前じゃないですか」と言って笑う。

「だって、もしそうだったら——誰がわたしを愛してくれるんですか？」

「そんなことはないわ。梢、あなたには——」

反論しかけたわたしの唇を、梢は自身のそれで塞いだ。

最近、よくわたしは考える。彼女が望んで彼女自身を縛っていたあの鎖は……果たしてどちらを縛る物だったのだろうか。

「……うふ、うふふふっ」

梢はわたしから唇を離すと、わたしの耳元で囁く。

「先生——もう、これからずっと——あなたを離しませんわ」



アンノーン・テイスド

大槻香織の
パラノーマルな
事件録
case2

著・水野尚 絵・なつなりあ

最近、妙だ。

足立誠一はふと思った。

何が妙か、と問われれば答えに詰まる。具体的に何が妙なのか誠一自身にも説明できない。

たとえば、目の前のこれ。

流し台にあったはずの食器が綺麗に片付けられている。朝食を食べる時に使った食器を確かに流し台に置き、そのままにしていたはずだ。

ところが、今現在は片付けられている。それも二人分。

誠一は大学二年生で現在アパートに一人暮らしだ。いつも食器は大学から帰ってきてから片付ける。親は時々来るが、合鍵は持っていない。彼女はいるがまだ部屋に呼んだことはない。

よって、アパートのこの部屋で食器を片付ける人物は誠一自身のみだ。食器が勝手に片付くはずがない。

他にもある。

昨日、ベッドの上で漫画を読み、そのまま枕元に置いて寝た。朝は片付けていない。

その漫画が、本棚に収まっている。

朝寝ぼけている間に無意識に戻したのだろうか。

そう考えれば、朝起きてからの記憶は少し曖昧だ。もしかしたら食器も自分で片付けたのかもしれない。

二人分あるのは、昨日の夜使った分を寝ぼけたまま今日の朝食分と一緒に洗ったからだ。

そうだ。そうに違いない。

誠一はそう思い、無理やり自分自身を納得させた。

そんなことよりも、今日は誠一にとって重大な日だ。

何が重大かというと、もしかしたら誠一は今日、大人の仲間入りができるかもしれない日だからだ。

彼女が初めて誠一のアパートに泊まりに来るのだ。健康な男子ならば、この意味がどんなものなのかすぐに分かる。

今日は誠一の脱童貞の日となるはずなのだ。

そんなつまらないことを考えていないで、まずは部屋の片づけだ。もちろん、アダルトな本は全て本棚の奥底に隠す。

そしてそわそわしながら掃除機を掛け、ゴミを纏める。

そうこうしている内に玄関のチャイムが鳴る。

「き、きた」

誠一は高鳴る鼓動を抑えるように深呼吸をし、玄関のドアを開ける。

「お待たせ」

ドアを開けて姿を見せたのは、真っ直ぐな髪の大人しそうな女性だった。柏谷ゆかり。大学に入ってから知り合った誠一の恋人である。

同じ一人暮らしかつ、アパートが近くだったため、自然と一緒に大学に通うようになり、最近

付き合い始めた女性だ。

「汚いところだけど」

誠一は少し引きつった笑いを浮かべ、ゆかりを中へと招き入れる。

「お邪魔します」

ゆかりも少し緊張した声でそう言う。

誠一はどきどきしながらリビングにゆかりを通すと、飲み物をテーブルに置く。

「今日から大学も夏休みだね」

「そうだね」

「誠一君は？ 夏休みは実家に帰るの？」

「いや。バイトしながら一人暮らしを満喫するよ。今だけだしね。ゆかりちゃんは？」

「わ、私は……」

ゆかりは少し顔を赤らめ、俯きながらこう言った。

「誠一君と一緒にいたいな……」

「！」

誠一は予想外の嬉しい言葉に顔を赤くする。

「そ、それはもちろん——」

誠一がそう言いかけると同時にゆかりは突如背後を振り向く。

「？」

ゆかりの行動を不思議に思い、誠一は首を傾げて問う。

「どうしたの？」

「え？」

ゆかりもまた不思議そうに誠一の方へ向き直る。

「うーん。気のせいかな。大丈夫。ね、誠一君。それよりお買い物に行かない？ 今日は私が作ってあげる」

ゆかりは少し緊張がほぐれたのか、ようやく自然な笑顔を見せる。

「そうだね。よし、行こう」

「うん。誠一君は何が好きなの？」

二人はこうした会話をしながら買い物に行き、食事をし、楽しい時間は過ぎて行った。

そして、運命の時間がやってきた。お互いシャワーを浴び、電気を消し、ベッドに並んで座る

。他に布団は用意していない。その必要はない。

「……いい？」

「……うん」

そう言うと、お互い目を閉じ、キスをする。誠一はキスをしながら徐々にゆかりに体重を掛け、ベッドにそっと倒す。

「誠一君。私……初めてなの」

「お、俺も」

「そうなんだ」

「……うん。情けないけど」

「ううん。嬉しい」

ゆかりは誠一の首に腕を回し、抱き締める。そして、耳元で囁くように言った。

「やさしくしてね」

誠一の理性はこれで吹き飛んだ。

少し荒々しくゆかりのTシャツを脱がせると、下着姿にし、露になった肌に唇を付ける。

「あ……」

ゆかりが甘い声を漏らす。それがたまらなく甘美で、誠一の本能をさらに刺激する。

「ゆかりちゃん！」

誠一がゆかりの首筋にキスをしようと押し掛かるが――

「ひっ！」

ゆかりは突如悲鳴を上げて誠一を突き飛ばす。

そして、脱がされた服を持ってベッドから離れる。

「ゆ、ゆかりちゃん？」

「だ、誰！？ その人誰なの！？」

「え？」

ゆかりが恐怖の表情を浮かべながら指差す先には――

「なっ！？」

女性が立っていた。

髪は長く、顔の半分を覆っている上に暗闇であるため、しっかりと判別できないが、無表情な黒服の女性がベッドのすぐ脇に立っていた。

いつからいたのか。どこから入ったのか。全く誠一には心当たりがない。買い物に出た時に侵入したのか。いや、鍵は掛けて出たはずだ。このアパートは天井裏に出る方法も無い。

考えられるとすれば合鍵だが、入ったとしていったいどこに隠れていたのか。1DKの小さいアパートには一人一人が隠られる場所はまずない。唯一押入れが隠れる程度のスペースはあるが、そこからいつ出たのか分からない。

シャワーは順番に浴びたから、この部屋が無人になったことはないはずだ。

「誠一君……。どういうつもりなの？」

ゆかりが咎めるような目で誠一を見る。おそらく、女性と既に同棲しているのを隠して自分を誘ったのでは、と疑い始めている。

誠一はそんなことはしない。そもそも目の前の女性には誠一が一番驚いているのだ。

「ち、違――」

「ごめん。私、帰るね」

ゆかりは慌ててTシャツを羽織ると、バッグを持って玄関に向かう。

「ゆかりちゃん！」

引き止める間もなく、ゆかりは逃げ出すように出て行ってしまった。

誠一は頭がおかしくなりそうだった。

一体この状況はなんなのか。

ここ最近の妙な出来事。そしていつの間にかそこにいる謎の女性。何よりせつかくの楽しい一時を台無しにされ、さすがの誠一にも怒りがこみ上げて来る。

「あんた！ 誰なんだ！ いつ、どこから入った！」

誠一は電気を点け、黒服の女性に詰め寄る。そこで誠一はふと気がつく。この女性に見覚えがあるのだ。

誠一はじっと女性を見る。

顔の右半分を隠す長い髪。丈の長い黒いワンピース。切れ長の目。

十分美女と言える風貌の女性だが、肌の白さがどこことなく病弱な、消えてなくなりそうな雰囲気を出している。

「誠ちゃん……」

「うお！」

誠一がまじまじと見ていると、不意に女性が口を開いた。

「ひどいよ……。私がいるのに他の女の人を連れて来るなんて」

「な、何言ってんだ？ っていうかあんたどこかで……」

そこまで言って自分で気がついた。

彼女は誠一と同じサークルに所属する女性だ。確か一つ下の新人で、歓迎会の時にも確かにいた。

名前は碓氷栄子《うすいえいこ》。新人の中でもっとも目立たなかった女性だ。

その女性がなぜここに。

「あ、あんた碓氷さん……だよな？ 一体どういうことなのか説明してくれないか？」

「……」

栄子はそれを聞くと突如大粒の涙を流す。

「お、おい」

誠一はいきなり泣き出した栄子に狼狽する。

「ひどい……。付き合おうって言ってくれたのは誠ちゃんなのに……」

「は？」

誠一にはそんな覚えはない。彼女とはサークルの歓迎会の時に会っただけだ。だが、あの時の誠一は初めての後輩で、かつ初めての飲酒だったため、だいぶ酔っていた。酔った勢いで何か言ったのだろうか。

「もしかして、俺酔って変なこと言った？」

「……」

栄子は涙を拭いながらこくりと頷く。

「だとしたら、ごめん。俺、初めての酒で酔ってその日の記憶ほとんど無くてさ。どうやって帰ってきたのかも覚えてなくて」

「送った」

「へ？」

違和感のある腹部を見ると、何やら銀色の金属が自分の腹部にめり込んでいる。

「――はっ!？」

ようやく誠一は自分が何をされたのか理解した。

刺されたのだ。包丁で。

同時に激痛が誠一の脳天を突き抜ける。

「はっが――」

激痛は呼吸を止め、誠一の脳を混乱させる。逃げようと一歩後ずさるが、力がうまくはいらない。

そのままよろけて床に倒れる。

「はっ……う――。はあ――」

呼吸をしようと息を吸い込むが、うまくいかない。酸欠で眩暈もしてくる。

「誠ちゃんを他の女に渡すくらいなら――」

栄子は血まみれの包丁をゆっくりと振りかぶり、誠一に馬乗りになる。

「や、やめ――」

「殺した方がまし」

栄子は無表情にそう言うと、包丁を誠一の腹部に刺す。

「はっぎ――」

「死ね」

「がっ――」

「死ね」

「げえ――」

「死ね」

「……はっが」

「死ね」

「……っ」

「死ね」

「……」

「死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。死ね。」

誠一が覚えているのは、包丁が十回ほど自分の体を出入りしたところまでだった。

鈴川市はもう夏である。六月の末ともなれば、気温は既に三十度近くになり、ほとんどの人は夏服に切り替える。

大槻香織ももちろん例外ではない。先週辺りから急に暑くなってきたため、スーツの上着は脱ぎ、ワイシャツにパンツスーツ姿で鈴川駅の目の前を通り過ぎる。

「きゃあ！」

――だが、ドジなのは相変わらずだった。メモ帳を見ながら歩いているのか、電柱に見事に頭を激突させた。

「いたたたた……」

大槻香織。職業・刑事――なのだが、大半の人間はそう言われてまず抱く感情が疑問だ。

少しタレ気味のくりくりとした目、若干癖のある亜麻色の長い髪、一般的な女性と比べても低めの身長。全体的に小動物のような雰囲気と童顔気味の顔、そして大きな黒ぶちの眼鏡のせいで、学生などに間違われることはあっても、二十五歳の現役警察官だと思う人間はまずいない。

それに加えて普段のドジっぷり。誰もが彼女を見てこう思うだろう。

なぜ刑事になれたのか、と。

だが、これでもれっきとした捜査一課の捜査員なのである。

香織はおでこをこすりながらずれた眼鏡を直し、再び歩き出す。こんな所で油を売っている場合ではないのだ。

少し急ぎ足で目的の建物に向かう香織。

鈴川駅から少し離れた裏路地とも言える場所にそれはあった。

超常現象研究所。いかにも胡散臭い、怪しい名前の場所である。だが、香織はそんなことなど気にせず、堂々とビルのガラス戸を開け、二階へと駆け上る。

そして、超常現象研究所と張り紙が張ってあるドアを遠慮も無く開け放つ。

「こんにちは。博士」

「あ、香織お姉ちゃん！」

先に返事をしたのは、年のころ五歳程の少女だ。丸い大きな目でツインテールの髪型の可愛い少女である。

火煉は香織を見るなり笑顔で駆け寄り、そのまま抱きつく。

「こんにちは火煉ちゃん。学校はどう？ 楽しい？」

「うん！ お友達もできたんだよ！」

剣火煉。この研究所の主の親戚であり、現在両親が海外に行っているためここで面倒を見ている。

非常に心配していたのだが、今のところ問題はないようだ。

「大槻様」

「あ、木春さん。こんにちは」

火煉に続いて顔を出したのは、白衣姿のボブカットの美女である。

菊木春。この研究所の主の助手である女性で、どこことなく西洋人形のような雰囲気を持つ、ク

ールビューティだ。

「あの、博士は？」

「博士でしたらあちらに」

木春が示した方向には、確かに白衣姿の男性がパソコンに向かってなにやら一生懸命操作をしている。

「博士、こんにちは」

「……」

香織は近づいて博士と呼ばれた男性に声を掛ける。

「は・か・せ」

だが、集中しているのか返事がない。香織は男性に近寄る。そして、パソコンから聞こえる音声に気がつく。

そして、みるみる内に顔を真っ赤にし、慌てて男性の背後に回ると、パソコンの画面を見る。

そこには、眼鏡を掛けた可愛らしい美少女（2D）が全裸でベッドに寝ていた。

「何してるんですかぁ！」

「むお！？」

香織は男性の後頭部を鷲掴みにすると、パソコンのモニターに叩き付ける。叩き付けた衝撃で二四インチの液晶ディスプレイが吹き飛ぶ。

だが、男性は特に気にした様子を見せず、おでこをさすりながら振り返る。

「ずいぶんと変わった挨拶をするな。君は」

「やかましいです！ 何をしてるんですか！ 昼間っから！」

「何と言われてもな。見ての通りデバッグ作業中だ。一通り作り終えたのでな」

男性はゆっくりと立ち上がると、白衣を翻して香織の方を見る。

振り返った男性は――

「来月頭にはデバッグを終えなければ修正までの時間がなくなる。コミケまでは既に二ヶ月を切っているのだから」

――とてつもない美形だった。

切れ長の目、シャープで細い頬から顎のライン、細めの眉、流れるような黒髪。俳優や男性アイドルでもここまでの美形はなかなかいない。

ホストでもやればあっさりとそのお店ナンバーワンになれそうな程だ。

剣讓治。この超常現象研究所の主であり、火煉の叔父にして木春の主人だ。

「……本当にこのゲーム売るんですか？」

「当然だ。そのために収録したのだから」

「あ、あの、今更ながら、音声無しには……」

「論外だな。このゲームの売りは音声付きという所だ。それを無くしてしまえば家庭用に移植したエロゲー以下となることだろう」

「ううう……。私、汚されちゃった……」

「心配するな。大概刑事。君の演技は素晴らしい。特に恥ずかしがる所の演技など、声優顔負

けだ」

「本当に恥ずかしかったですよ！」

顔を真っ赤にして怒鳴る香織。

当然だ。何しろ譲治がデバッグしていたゲームの女性キャラの声は香織が担当したのだ。それもアダルトゲームである。

最近起きた事件の情報と引き換えに香織は譲治の作る同人ゲームの声を担当することになったのだが、香織はアダルトゲームだと知らずに引き受け、半ば無理やり音声を言わされて収録したのだ。

香織にとってこの出来事は人生の中でもっとも恥ずかしい出来事に分類されているであろう。

「ところで大槻刑事。ここに来たのはわざわざ私の顔面を液晶に埋めるためかね？」

「あ、そうでした。また助言を頂きたい事件が起きまして」

「ほう」

譲治は立ち上がると木春にお茶を出すように指示する。

香織も慣れた手つきで手近なテーブルの上を片付けるとそこに座る。座った香織の膝の上に当然とばかり火煉が座ったところでお茶とケーキが木春の手で並べられる。

鈴川市を騒がせた連続放火事件以来、特に用事が無くても香織はここへ顔を出しては火煉の勉強を見たり、譲治の手伝いを（無理やり）させられたりと、ただの知り合い以上の付き合いになりつつある。

香織は膝の上でケーキを頬張る火煉を撫でながら紅茶を一口すする。

譲治も一口紅茶を飲んだところで切り出す。

「それで？ どんな事件かね？」

「博士が興味を持ちそうな事件です。多分……」

「多分？」

「よく……分からないことが多くて。まず、事件の発端ですが、昨日の夜、鈴川市のアパートで鈴川大学の男子学生が殺害されました。被害者は足立誠一さん、二十歳です。死因は腹部を包丁で複数回刺されたことによる失血死です」

「滅多刺しとは普通ではないな。怨恨かね？」

「ええ。捜査本部もその見解です。第一発見者は彼の恋人である柏谷ゆかりさんです。その供述が奇妙というか……」

香織はメモを取り出し、それを読み上げる。

「ええと。ゆかりさんは昨日の夕方、足立さんのアパートを訪ね、夕食を共にしました。その後、夜九時頃に足立さんの部屋に女性がいることに気づき、混乱した彼女は部屋を飛び出しました。その後、落ち着いた彼女は足立さんに電話をしましたが繋がらず、アパートを訪ねたところ――」

「血まみれで倒れていた、と」

香織はこくりと頷く。

「では、その部屋にいたもう一人の女性が犯人なのでは？」

「ええ。本部もそう考えています。監視カメラの映像と彼の交友関係から、部屋にいた女性は足

立さんと同じサークルに所属する碓氷栄子さんと断定しました」

「では、その女性を逮捕して事件は終了だな」

「……はい。捜査本部の誰もがそう思っていました。でも――」

捜査員が彼女の住んでいるアパートに行ったところ、彼女の姿はなく、既に姿を消していた。

「不思議なのはその後なんです。碓氷栄子のアパートの監視カメラの映像を確認したところ、捜査員が部屋に行った時に彼女は在宅していたはずなんです」

「――ほう」

讓治の目の色が変わる。どうやら興味を示し始めたようだ。

「少し細かい説明をしますね。まず、碓氷栄子は昨日、足立さんを殺害した後、堂々と返り血を浴びたまま帰宅しました。エントランスとエレベーターの監視カメラにその姿が映っています。その時間が午後十時頃。その後、彼女は監視カメラに姿を映していません。捜査員が碓氷栄子の部屋に行ったのが、今日の午前四時。ですが、捜査員は碓氷栄子の姿を見つけられず、本部に戻りました。その後、念のため碓氷栄子のアパートの捜査員を配置し、監視をしていましたが、午前七時頃、監視カメラに外に出る彼女の姿が映り、慌てて追いかけて見失いました」

「ふむ。確かに妙だ」

「そうなんです。もちろん捜査員は碓氷の部屋を確認した後、アパートの全住人に事情聴取を行っています。ですが、匿っている様子もなく、全員が目撃していません」

監視カメラに移った時間と捜査員が来た時間を見ると、間違いなく碓氷栄子はアパートの内部にいたはずだ。だが、捜査員はアパートの全部屋を管理人に借りた鍵で全て調べたが、碓氷がいる様子はなかった。その間、アパートのエントランスを見張っていたのは香織自身である。

だが、碓氷は一度も姿を現していない。部屋とアパート内部の捜査は彼女の上司であるベテラン刑事、緒方正志警部補だ。見逃すなど考えにくい。

捜査員は碓氷栄子は既に逃走したものとし、アパートを一通り調べた後、捜査員である江原健介を見張りとして残し、本部に戻った。

だが、逃げたはずの碓氷栄子の姿を発見し、江原刑事は追いかけたが、見失ったというのだ。

讓治はそれを聞いて興味深そうに頷いている。

「他にもあるんです。第一発見者の供述が少し妙で」

「聞かせてくれ」

香織は頷くと、話し始める。

「彼女、ゆかりさんが足立さんの家に来た後、二人は一步も部屋を出ていません。ですが、彼女が言うのは碓氷栄子はいつの間にかその部屋にいたと言うのです」

「どこから侵入したのか？」

「アパートをくまなく調べたのですが、足立さんの部屋は四階です。窓からの侵入は考えにくく、窓も閉まっていた。無理やり開けた痕跡もありません。入るとしたら玄関ですが、ゆかりさんは確かに鍵を掛けたと供述しています」

「ふむ。先ほど、九時頃に碓氷が部屋にいることに気づいたそうだが、入ってきたことには気づかなかったのか？」

「はい。ゆかりさんの話ではいつの間にかその場にいたそうです。まるで幽霊のようだ、と」

「いつの間にか、か」

讓治は何かを確かめるように目を閉じる。

「問題となるのは三つ。碓氷栄子は足立誠一の部屋にどうやって入ったのか。そしていつ入ったのか。そしてどうやって捜査員に見つからずにやり過ごせたのか。カメラに映り、人を殺せたということは、その女は実在しているはずだ。ならば、必ずこの三つに回答があるはずだ」

「でも……それが分からなくて。皆首を傾げているんです」

「ふむ」

讓治は紅茶を飲み干すと、立ち上がり、腕を組む。

「柏谷ゆかり。彼女と話すことは可能かな？」

「な、なんとかします」

香織は顔を引き締めながらそう答えた。

柏谷ゆかりは現在、鈴川警察署の一室で事情聴取を受けている。本人には伝えていないが、捜査本部では彼女が足立誠一を殺害した可能性も考慮しているのだ。

少なくとももう一人の重要参考人、碓氷栄子が確保されるまではいてもらう方針だ。

ゆかりの前には今、厳つい男性の刑事が座り、難しい顔で書類を見ている。角刈りの頭に角ばった顔。いかにも現場叩き上げの刑事らしい男性だ。

緒方忠志警部補。大槻香織の上司である。

一通り事情聴取も終わり、緒方警部補はゆかりの証言を整理しているところだ。おそらくゆかりは嘘はついていない。

だが、やはり不可解なのはここだ。

いつの間にか女性が部屋の中にいた。

ゆかり自身もいつから女性がそこにいて、どこから入ったのか全く分からない様子だ。

正直、これ以上ゆかりからは何の証言も得られない。

碓氷栄子も現在捜索中。とりあえずすることが無くなってしまった。

これからどう動くべきか思案していると、

「失礼します」

緒方警部補の背後のドアが開いた。入ってきたのは香織と木春、そして讓治である。

「大槻か。って、お前な……」

緒方警部補は香織に続いて入ってきた讓治達を見てあからさまに不機嫌な顔を作る。

「す、すみません！ 警部補！ 博士が本人と直接話をしてみたいと……」

「……まあ、いい。確かにそっちの男の知識は役に立つ。だが、彼女からはもう新しいことは聞けんと思うがな」

そう言うと緒方警部補は腰を上げ、讓治に席を譲る。

「すまんね。無理を言って」

「あくまでお前は一般人だということを忘れるな。あまりこちらのことに首を突っ込まないなら、捜査協力ということにしておいてやる」

「善良な一般人として協力させてもらうよ」

譲治はそう言うと、ゆかりの前に座る。

「あ、あの……」

ゆかりは狼狽した様子で譲治を見る。当然だ。恋人を殺され、警察に事情聴取を受け、さらに正体不明の白衣の美形が突然現れたとなれば、混乱するのも当然だ。

むしろ、ここまで冷静に話ができるだけ大したものである。

「初めまして。柏谷ゆかりさん。私は剣譲治という。職業は研究者さ。少し不可解な話を聞いて君と話をしたいと思ってね」

譲治はゆかりが憔悴していることを悟り、優しく囁くように言う。渋い声であるため、非常に魅惑的な声だ。

「はあ……」

だが、その美声も今のゆかりには通用しないようだ。疲れきった声で答える。

「私が君に聞きたいのは一つだけ。部屋にいた女性についてだ。君自身も不思議に思っているのだろうか？」

「はい」

「確認したい。君は確かに彼氏と部屋に二人きりだったのだね？」

「はい。間違いありません。あ、ただ……」

「なんだい？」

「……いえ。なんでも」

「いや、何か思い当たることがあればなんでも言って欲しい。例えばそれが」

譲治は言葉を区切り、ゆかりに顔を近づけて言った。

「どんなに常識外れなことでも」

ゆかりは考え込むように黙ると、歯切れ悪く答えた。

「その……なんていうか……誠一君の部屋に入った時、変な感じがしたんです」

「ふむ」

「その……誰かに見られているというか……他に誰かいるような……。すみません。うまく説明できなくて……」

「なるほど。その気配はずっと続いていたかい？」

「はい。彼がお風呂に入っている時も、私がお風呂に入っている時も……。常に纏わりつくように……。気のせいだとは思っていましたが、正直少し気味が悪くて」

「なるほど」

そこまで聞くと譲治は香織の方を振り向く。

「香織君。現場の監視カメラの映像は全て確認したか？」

「あ、いえ。事件の前後数時間分のみです」

「残っているだけ全て確認させてくれ」

「江原にやらせよう。丁度現場にいる」

緒方警部補が携帯を取り出すと江原刑事に掛ける。

「あの、何か分かったんですか？」

「いや。何も」

かくんと香織の首が下がる。

譲治は香織に向き直ると、再度質問をする。

「では、彼のことで何か知っていることはないかい？　どんな細かいことでもいい。辛いかもしれないが何かあれば話して欲しい」

「……」

ゆかりは下を向いて考え込む。

「そういえば誠一君、変なことを言っていました。最近、誰かが部屋に入ってきているような気がする、と。何か盗られたわけでも荒らされたわけでも無かったので気のせいかな管理人さんが入ったかどちらかだろう、と」

香織は頭を抱える。

物盗り以外の理由で人の部屋に入り、出て行くという行為に何の意味があるのだろうか。

この事件、ますます不可解な部分が増えていく。

「何！？」

香織が頭を抱えている横で緒方警部補が突如怒鳴る。

「すぐに行く。待ってろ」

緒方警部補は電話を切り、香織の方を向く。

「大槻、なんたら博士。ちょっと来い」

緒方警部補が部屋の隅に二人を呼ぶ。

「どうしました？」

「……別な日の監視カメラに碓氷栄子が映っていたらしい」

「え？」

香織は驚いたように目を見開く。

「何がなんだかよく分からん。ともかく行くぞ。あんたも行くだろ？」

「もちろん」

香織は頷くと、ゆかりの方を向く。

「ゆかりさん、私達少し現場の方に行ってきますね。少ししたら戻ってきますので、もう少し待って頂けますか？」

「……はい」

ゆかりは疲れたように頷いた。

慌しく出て行く刑事二人と白衣の男女をゆかりは見送る。

無人になった部屋でゆかりは溜め息をつく。

「誠一君……」

血まみれの誠一の姿を見てから十時間近く過ぎてようやく一人になったゆかり。一人になった途端、これまで考えていなかった、考えないようにしていた事を考えるようになった。

(どうしてこんなことに……)

誠一がなぜ殺されたのか。あの女性はなんだったのか。ゆかりには分からない。ただ、一つ分かっているのは、あの時誠一の部屋を飛び出さなければ誠一は死なずに済んだ可能性はある。

誠一の浮気相手だと最初は思った。だが、誠一にあの部屋に他に女性がいるような態度はなかった。

自分の恋人をなぜ一番に信用しなかったのか。もし信用し、二人であの女性を問い詰めれば、誠一も死なず、ゆかりが誤解するようなこともなかったかもしれない。

そう思うと今更ながら涙が出てくる。

「誠一君……。誠一君……。ごめんなさい……。ごめんなさい……」

肩を抱き、顔を伏せて涙をこぼすゆかり。

だが、不意に部屋のドアが開く。ゆかりは刑事が戻ってきたと思って慌てて涙を拭き、顔を上げる。

「……？」

だが、ドアは開いているが、誰もいない。確かにドアが開く音がし、誰かが入ってきたと思ったのだが、部屋には誰もいない。

ゆかりは不思議に思いながら立ち上がり、ドアを閉める。

勝手に開くような作りのドアではない。開けるにはドアノブを回して押す必要がある。ならなぜドアが開いたのか。

ゆかりにはさっぱり分からなかった。

ゆかりはドアノブから手を離し、振り向く。

そして、椅子に座ろうと席に戻るが、その途中――

「貴女が悪いんだからね」

「ひっ！」

突如耳元で声が聞こえた。

驚いてその場を離れるゆかり。

振り向くと、いつの間にか女性が立っていた。誠一の部屋で見た時と同じ、黒いワンピースを着た黒髪の女性。

碓氷栄子である。

一体いつ部屋に入ったのか、どうやってゆかりに気づかれずにいったのか。ゆかりには全く分からない。

ゆかりは突如現れた栄子に驚き、ただ硬直する。

栄子は固まっているゆかりにゆっくりと近づく。

「貴女が悪いの」

「な、なんのことですか」

「私の誠ちゃんに手を出すから」

栄子の言葉で確信した。

やはり誠一を殺したのはこの女だ。

「どうして……。どうして誠一君を殺したんですか」

「簡単よ。殺したら他の女に手を出せないでしょう？」

「そ……」

「私以外の女に手を出すなんて。そんなこと彼女なら許せるわけじゃない。だから手出せないように殺したの」

もはや理屈は通じない。もし誠一が本当に栄子と付き合っていたとしても殺される程のことはしていない。

そもそもこの女の言う「付き合ってる」が一般常識のそれに当てはまるのかすら疑問だ。

この女の一方的な思い込みも有り得る。

「でもね、誠ちゃんはそれでいいとしても、貴女は別。貴女には――」

栄子はそう言うと、にやりと笑い、死んだ魚のような視線をゆかりに向ける。

そして、ポケットから折り畳み式のナイフを取り出す。

「――他人の男に手を出した罰を与えないと」

「いやあ！」

ゆかりは声を上げてドアに向かって飛び出す。だが、その背中に栄子が押し掛かり、床に倒す

。

「いやあ！ 助けて！」

栄子は暴れるゆかりの背中に馬乗りになり、ナイフを両手で握って振りかぶる。

「ばいばい。泥棒猫さん」

そして、そのナイフをゆかりの背中に振り下ろした。

足立誠一が殺害されたアパートの管理人室に着くなり、香織達を江原が出迎えた。

「わざわざすみません。緒方警部補。……ってこの二人は？」

「気にするな。それより、本当か？ このアパートの監視カメラに碓氷栄子が映ったというのは」

「はい。映像を見てください」

江原は管理人室に置いてあるレコーダーを操作し、問題の映像を再生させる。

「このアパートは大体一ヶ月程監視カメラの映像を保管しているのですが、これは二週間程前の映像です」

そこには酔っているのかおぼつかない足取りでロビーを通過する誠一の姿があった。その後ろに、まるで影のように黒髪の女性が寄り添っている。

「……碓氷栄子だな」

「はい。そしてその後なんですが……」

江原はさらにレコーダーを早送りにする。

その映像には、碓氷栄子が何度も足立誠一に付き従うように歩いている姿が映っていた。

朝は誠一と一緒に大学に出掛け、帰りは一緒に帰って来る。それだけならばただ仲のいい同棲カップルなのだが、誠一はまるで栄子を気にとめていない。

というより、栄子の存在に気付いていない。



「不思議なのはもっとあります。まず管理人さん」

江原がそう言うと、初老の男性が申し訳なさそうに前に出る。

「あなたはこの女性を見たことありますか？」

「……いえ。私もビデオを見て驚きました。彼が帰ってくるのはよく見ているし、会えば話をするのですが……」

管理人と立ち話をしている誠一の姿も確かに監視カメラに撮られている。その背後には碓氷栄子の姿もある。

だが、管理人は栄子の姿に全く気付いていない。

「そしてこの住人にも話を聞きましたが、誰も足立君が女連れだったことを知らないんです。すれ違っているはずなのに」

緒方警部補は腕を組んで黙る。

姿はこうして映っているはずなのに誰も気付いていない。

まるで幽霊である。

「あの、事件の前に最後に碓氷栄子が映ったのはいつ頃ですか」

「当日だよ。大学から帰ってきた彼の後ろに映っていた。他の日と一緒に。ただ違うのは、この日は柏谷さんが後から来たくらいだ。その間に碓氷栄子は監視カメラに映っていない」

「それってつまり……」

「碓氷栄子は最初から足立誠一の部屋にいた、ということだ」

興味深そうにビデオを見ていた譲治が不意に口を開く。

「これで碓氷栄子がいつ、どうやって足立誠一の部屋に侵入したのか判明したな。答えは、最初から、。碓氷栄子は最初から足立誠一の近くにいたのだ。柏谷ゆかりが来る前から」

「で、でも、ならなぜ——」

香織がそう言いかけた時、緒方警部補の携帯電話が鳴った。

「俺だ。どうし——」

電話に出た途端、緒方警部補の顔色が変わる。

「柏谷ゆかりが……刺された？」

「「！」」

最初に異変に気付いたのは、受付にいた女性警察官だった。叫び声が聞こえたため、何かと見に行くと、応接室でゆかりが倒れていた。

背中にはナイフが刺さっており、発見した時には既に意識不明の状態だった。

すぐに救急病院へ搬送し、緊急手術が行われ、一命は取り留めたが、予断を許さない状態だという。

香織達は病院のロビーに集まり、情報を整理していた。

「警察の監視カメラを見ました。やはり刺したのは碓氷栄子ですね。映っています」

「……ならなぜ誰も気付かなかった」

緒方警部補は静かに、だが怒りが混じった口調で言った。

警察署内部で白昼堂々と刺傷事件が起きた。これは警察としての失態である。

「受付にいた女性警察官も、映像を見て驚いていました。全く見覚えがない、と」

「目の前を堂々と真っ黒な女が通ったにもかかわらず、か？」

江原は静かに頷く。

緒方警部補は溜め息を壁に手をつく。

「何者だ？ 碓氷栄子って女は」

「緒方警部補。それについて私に一つ仮説がある。聞いてくれるか？」

「……いいだろう。聞かせてくれ」

譲治の提案に不承不承に頷く緒方警部補。

「博士。何か分かったんですか？」

「うむ」

問い掛ける香織に勿体をつけるように頷き、白衣のポケットに手を入れる譲治。

「一言で言い表すと、碓氷栄子は透明人間だ」

「「はあ？」」

いきなりの譲治の言葉に木春以外の三人が声を上げる。

「監視カメラに映っているし、柏谷ゆかりは碓氷栄子の姿を目撃している。どこが透明なんだ」

江原は苛立ったように譲治に問い詰める。だが譲治はその質問は想定通りとでも言うかのよう
に続けた。

「視覚的な透明とは言っていない。彼女のはおそらく、存在透明者だ。いや、存在希薄者とでも
言うべきかな」

「存在希薄者……」

「よくいるだろう。あの人は存在感がない。影が薄い、と。碓氷栄子はそれが極端なのだよ。も
はやそういう能力と言ってもいいくらい、影が薄いのだ」

「おいおい。また超能力か？ 勘弁してくれ」

「……続けてくれ」

あからさまに馬鹿にする江原に対し、以前超能力者が起こした事件の当事者である緒方警部補
と香織は真剣な表情で聞き入る。

「彼女は視覚的に……可視光線の反射という意味では通常の間と同じだ。可視光線を認識する
のは人間の脳。その処理まではおそらく通常なのだ。だが、彼女はそこから先の認識に阻害を
及ぼす能力を持っている」

人間の視覚情報はまず目の網膜から入った可視光線を電気信号にし、それを脳に伝え、脳はそ
れを映像として認識する。

そうすることで人間は `視えている、のだ。

だが、最後に認識できなければどうなるか。

それは `視えていない、ことと同義である。

「彼女の視覚情報は脳に認識されにくい。だが、ビデオは単純に光の情報をデジタル信号として
記録するだけだ。だからカメラ越しならば見える」

そう考えれば確かに辻褄は合う。

部屋にいることに気付かなかった誠一とゆかり。

アパートの住人の目撃証言の無さ。

そして神出鬼没の碓氷栄子。

すべてが碓氷栄子の存在感の無さだとしたら――

「彼女こそ本物の追跡者《ストーカー》だ。見えざる追跡者《アンノーティスト・ストーカー》、とでも名づけようか。彼女に狙われれば……たとえ屈強なSPに囲まれた総理大臣とて容易く殺される。何しろ「視えない」のだから」

香織達は戦慄を覚える。

透明人間の暗殺者は、フィクションの世界では恐るべき敵としてよく登場する。だが、これはあくまでフィクションだ。現実の世界で透明な――視えない暗殺者が実在すればそれは脅威以外の何者でもない。

「くそ！ そんな奴を野放しにはしておけん！」

「い、いや、緒方警部補、本当にそんな話信じてるんですか？」

江原が困ったように緒方警部補に問い掛ける。彼はこの間起きた連続殺人事件の犯人の能力を直接見てはいない。

だから信じられないのだ。

「信じる信じないは別として、現実には俺たちは碓氷栄子に出し抜かれてばかりだ。本当にそんな能力があるのかは捕まえてみればいい。どの道殺人容疑での令状が出てるからな」

「どうします？ 警部補」

真剣な顔つきの香織の問いに緒方警部補は唸る。

碓氷栄子の能力はともなく、殺人犯をこのままにはできない。かといって、そう簡単に捕まえられる相手ならもうとっくに誰かが捕まえている。

「まずは碓氷栄子の自宅だ。家宅捜査の令状なら一度降りているからな。江原。お前はここで柏谷ゆかりを守れ。大槻、お前は俺と来い」

「ちょ、ちょっと待って下さい！ 警部補！ そんな危ない奴がいる所に大槻を連れて行くんですか？」

「だから連れて行く。言ったはずだぞ？ 大槻はドンパチ担当だ」

緒方警部補はそう言って歩き出す。香織は江原に頭を下げて緒方警部補を追いかける。

が、緒方警部補曰くのドンパチ担当は何も無いはずの病院の廊下で派手にすっ転び、鼻血を拭いていた。

碓氷栄子のアパートは通っている足立誠一が殺害されたアパートから徒歩で約二十分程度のところにあった。

特に変わった所はない、一人暮らしにはちょうどいい1DKのアパートだ。

碓氷栄子も不在である。早朝外へ出たきり帰ってきていないようだ。

緒方警部補と香織は土足で栄子の部屋に入る。その後ろから譲治と木春も着いて来る。

「特に変わったところはないな」

「そうですね。普通の女の子の部屋です」

碓氷栄子の部屋は至って普通だ。ダイニングキッチンにテレビが置いてあり、その前にテーブルと椅子。寝室らしき部屋には小さめのベッドと机があり、参考書が置いてある。本棚に置いてある本も普通だ。参考書に小説が大半。あとは何冊かの漫画本だ。

年頃の女の子の中ではうしろ物が少ないほうだろう。

それに、この部屋には既に捜査員が一度入って調べている。事件と関連性がある物がそう簡単に見つかるならば、既にその捜査員が発見している。

「警部補、この部屋の家宅捜査は？」

「令状は取れているからやってもいい。先にここに訪れた捜査員は隅々まで調べてはいないからな。おっと、博士は手、出すなよ。捜査員じゃないからな」

「無論だ。さすがにわきまえているよ」

譲治はそう言うと、部屋を探し始めた二人を眺める。

「押入れやクローゼットには服しかない」

「机の引き出しにも特には。本棚にも特に変わった物は……あ」

香織は思わず声を上げる。

「アルバムがありますね」

香織は本棚の隅に納められていたアルバムを取り出し、中を開く。

そこには幼少期から大学入学までの碓氷栄子の姿が映っていた。

おそらく両親が撮影していたのだろう。この時点ではまだ能力が目覚めていなかったのか、屈託無く笑う栄子の姿が写っていた。

そしてその隣には常に男の子が写っている。元気そうな短い髪の男の子だ。写真の近くには「栄子 正人君と」と書いてある。この「正人君」が栄子の隣に写っている男の子だろうか。

「この子は……」

香織がそう言った瞬間、玄関のチャイムが鳴った。香織と緒方警部補は半ば条件反射的に懐の拳銃に手を伸ばす。

そして、二人で顔を見合わせ、ゆっくりと玄関に近づき、香織がドアノブに手を掛ける。

緒方警部補が頷くのを無言で確認し、香織は一気にドアを開け放った。

「うわ！」

ドアの前には、二十歳前後の男性が立っていた。

もうじき夏だというのに紺色のパーカーを羽織り、フードで顔を隠しており、明らかに顔を見られることを避けている。

「あ、あの、あれ？ ここって栄子の部屋じゃ……」

その言葉に緒方栄部穂がいち早く反応した。

「碓氷栄子を知っているのか？」

「え？ え？ あの、誰ですか？」

男性にそう言われた二人は警察手帳を見せる。

だが、男性は驚きはせず、ただ納得して頷いた。

「警察の方でしたか」

「あなたは？」

「俺は……」

男性はフードを取り、素顔を見せる。

「あ！」

香織はその顔に見覚えがあった。

「もしかして……正人君？」

「はい。俺は伊藤正人。栄子の知り合いです」

栄子の部屋を出た一同は正人と共に近くの喫茶店で話を聞くことにした。

緒方警部補はコーヒーを一口飲むと、正人を見て切り出した。

「まずは君と碓氷栄子の関係を知りたい。話せるか？」

「……はい。簡単に言うと……俺と栄子は以前恋人同士でした」

香織はメモを取りながら頷く。

「以前、ということは今は？」

緒方警部補の質問に正人はずっとポケットに入れていた左手を出す

「——うっ！」

その手を見て思わず香織は呻き声を上げた。

左手の薬指が無かったのだ。

「栄子に切られました」

「DV……と言ってもいいんだらうな」

DV。ドメスティックバイオレンス。最近何かと話題になる家庭内暴力のことである。だが、今では近い関係者からの暴力にもこの言葉を使っている。

恋人から受けた肉体的・精神的暴力もDVにカテゴライズされているのだ。

「栄子は……独占欲が人一倍強いんです。これは他の女と結婚できなくさせるために栄子がやりました」

この時点で既に異常である。左手の薬指を切り落としたからといって結婚できないわけではない。日本の法律上、婚姻届を提出すればそれだけで結婚は成立する。

栄子もそれは分かっているはずだ。だが、そうせざるを得ないほど思い込みが激しいのだらう。

「いわゆるヤンデレというタイプの女性か」

「なんですか？ それ」

香織に問われた譲治は得意げに説明する。

「精神的に病んでいながらもデレる女性、略してヤンデレだ。メンヘラとも言われたりするが、こちらは男性にも使われる。ヤンデレはあくまで女性限定だ。ヤンデレにも色々あるが、端的に言えば異常な愛し方をする女性のことだ。精神的に病んでいる状態でありながら過剰なまでに愛情を訴えたり、思いが強すぎるあまり倒錯的で異常な行動を起こしたり、といった具合にな」

譲治の説明に正人は頷く。

「俺と栄子は幼馴染なんです。家が近所で、しょっちゅう遊んでいました。中学にもなるとさすがに付き合いは減りましたが、高校に進学した時に栄子に告白され、付き合い始めました。

でも……それからはまるで」

地獄でした、と消えそうな声で話す正人。

正人の話によると、栄子の独占欲は並大抵ではなかった。

同じクラスの女子と話すだけで問い詰められ、電話に出れないと浮気と言われ、自分のことを最優先させなければ激怒する。

それは徐々にエスカレートしていった。

「高校三年の冬、卒業式の直後、俺は監禁されたんです」

香織は息を呑み、メモをしていた筆を止める。

「理由は簡単でした。卒業式の日、俺はクラスメートの子に告白されたんです。断ったのですが、それを見られていました。そして栄子は俺を他の女と接触できないように監禁しました。監禁すればずっと一緒に、しかも栄子以外には会わない。栄子の家は両親がどちらも海外で働いているため、高校に入ってから一人暮らし同然でした。俺は栄子の部屋に閉じ込められ、生活の……生きる全てを栄子に握られました。二週間程度でしたが、その一週間はとても辛かった。左手の薬指を切られたのもこの時です」

「発覚したのは？」

「俺の両親がさすがに不審に思い、栄子の部屋に踏み入ったんです。そこで過労で倒れている俺を発見し、病院へ連れて行きました」

「過労？ 寝させてもらえなかったんですか？」

正人はこくりと頷く。

「女性にはあまり言いたくないことなんですが……その……栄子はセックス依存症でもあったんです」

それを聞いた途端、正人の過労の原因が分かったのか、顔を赤くしてメモで覆う香織。

「いちいち反応するな」

緒方警部補は溜め息をついて促す。

「四六時中セックスを要求されたってわけか」

「はい。休みの日は特に。朝から晩までずっとです。俺は発見された時、衰弱して意識不明の状態でした。病院に搬送され、俺の両親から栄子の両親にそれが伝わり、俺と栄子の関係はそこで両親の手で終わりました。それが二ヶ月前です。両親はお互いこのことを世間には隠し、栄子には強制的に学校に行かせ、俺はそのまま高校を辞めて今は働いています。それ以来栄子とは会っていないんですが……」

正人はそう言って俯く。

「なかなかのヤンデレ振りだな」

「あの、博士、やっぱり碓氷栄子も精神疾患を持っているんですか？」

「可能性は高い。ヤンデレとして描かれる女性に多い精神疾患が境界性パーソナリティ障害だ」

難しい単語に一同は首を捻る。

「境界性パーソナリティ障害とは、一昔前は人格障害とも言われていた精神疾患だ。だが、この名称は外間が悪いということで境界性パーソナリティ障害と名前を変えられた」

境界性パーソナリティ障害とは、神経症と精神病の境界領域にいる状態のことを指す精神疾患だ。二十代の女性に患者が多く、年齢と共に改善されることが多い。

「この精神疾患の大きな特徴として二極思考、対人関係の障害、自傷・衝動行為が上げられる。つまり、行動が極端なのだ」

「わ、分かる気がします。栄子はちょっとしたことですぐかっとなり、極端な言動が多くなります」

正人の言葉に譲治は頷く。

「典型的だな。境界性パーソナリティ障害の患者は、プラス思考とマイナス思考の移行が激しい。プラス思考の時は男性に物凄くベタベタと甘え、愛の言葉を囁く。これがデレの部分だ。ところが、他の女性と喋った、電話に出てくれない、などと些細なことが原因で自分のことが嫌いになった、捨てられるというように一気にマイナス思考へと転換する。そして、そうなると会話が通じなくなり、衝動的に相手や自分を傷つける、監禁する等の犯罪行動を行う。これがヤンの部分だ。男性にもまれに起きるが、男性の場合はここに女性にはない筋力が加わり、取り返しのつかない事態になることが多い」

「それじゃあ、逮捕しても心神喪失で無罪になることもあるのか？」

江原の問いに譲治は首を振る。

刑法三九条では被告人が心神喪失である場合は責任能力がないと判断され、無罪となり、心神耗弱の場合は責任能力が軽減され、減刑となることが書いてある。

境界性パーソナリティの場合、この責任能力が争点になる可能性が高い。

「いや。先ほども言ったとおり、境界性パーソナリティ障害は軽い精神疾患である神経症と重い精神疾患であるうつ病や統合失調症等の間にある疾患だ。裁判では境界性パーソナリティ障害であれば完全責任能力があり、統合失調症ならば心神喪失として無罪になる。裁判官、あるいは裁判員がどう判断するか、だ。どの道、逮捕し、治療を施さなければ犠牲者は増える可能性が高い」

「栄子……」

正人はかつての恋人の名を呼びながら頭を抱える。

「ところで君は碓氷栄子のことが見えるのか？」

「え？ 見える？ どういうことですか？」

不意打ち気味の譲治の質問に正人は返答に困る。というよりは質問の意味が分かっていないようだ。

「……ふむ。これは……興味深いな」

「あの、博士？」

譲治は問い掛ける香織に答えず、一人でぶつぶつと呟いている。

「一つ聞きたい」

緒方警部補が難しい顔をしながら正人に尋ねる。

「今日はなぜ別れた女の所へ？ 会えば君もまたひどい目に遭わされるかもしれなかったぞ？ 下手をすれば殺されかねない」

正人は顔を上げて答えた。

「彼女を止めに来ました。たとえ殺されても、彼女を止めたい。今日のニュースで鈴川大学の学生が殺されたと聞いた時、栄子だと思いました。確信はありませんでしたが、皆さんがいたのなら、やはり犯人は栄子です。俺は……栄子に普通の女の子になって欲しいんです」

自分は殺されかけたというのに、それでもなお栄子の心配をしている。殺されるかもしれないと分かっている栄子に会いに来た正人に緒方警部補も思うところがあるのだろう。感心したように頷く。

「ならば、俺達で碓氷栄子を止めるぞ」

「でも、緒方警部補、どうやって碓氷栄子を見つけるんですか？」

「それについては既に考えがある。木春」

「はい」

これまでただ黙ってじっと待っていた木春がようやく動き、手提げバッグの中から何やら大きなバイザーのような物を取り出す。

「さて、急ごしらえだがなんとかなるか」

譲治はそれを手に取ると、何やらいじり始める。

「あの、博士？ それは？」

「よし。さあ、大槻刑事」

「え？ え？ きゃっ！」

譲治は突如振り向くと、不意に先ほどのバイザーを香織に被せ、スイッチらしき物を押す。

「え？ え？ あれ？ これって……カメラなんですか？」

「ヘッドマウントディスプレイの横にテープでCCDカメラをくっつけて接続しただけだ。だが、よく見えるだろう？」

「そうか。カメラか」

緒方警部補もようやく理解した。

碓氷栄子の姿は脳に認識されない。だが、カメラ越しならば普通に見える。それを利用し、ヘッドマウントディスプレイとCCDカメラを目の代わりにしたのだ。

「なるほど！ これならはっきりと見えます！」

「だが問題がある。それは私の私物だから一つしかない上に、この辺りには売っていない。調達には二、三日掛かってしまう」

「そんな悠長なことをやっている間に高飛びされるな」

緒方警部補は再び腕を組む。

「そこでだ。緒方警部補。私に一つ作戦の提案がある」

「ほう。聞こう」

「それは――」

碓氷栄子は自分のことを理解している。

内向的であまり喋る方ではないことも。

男を自分の物にしなければ気がすまない性格であることも。

自分が他者に気付かれにくい存在であることも。

彼女は知っているのだ。自分には幽霊のように相手の視覚から逃れる能力があることを。

だがそれゆえに彼女は寂しかった。唯一の理解者である幼馴染の正人には、彼の両親が会うことを許さなかった。

彼女は彼自身も彼の両親も大好きだ。だから、大人しく身を引いた。

だが、それは彼女にまるで半身を失ったかのような喪失感を与えた。

彼女はその喪失感を埋めたかった。

そして見つけたのが足立誠一。優しくて真面目で、どことなく正人に似ている雰囲気男性だった。

彼に話しかけられ、告白された時、彼女はようやく喪失感を埋めることができた。

だが、前の男にやったことと同じことをすれば、おそらくまた失う。

それは嫌だった。

だから今度は彼を束縛するのは止めた。そばに寄り添い、彼を支え、彼に尽くす。内助の功というやつだ。

故に誠一の部屋に行き、甲斐甲斐しく彼の世話をした。たとえ彼に相手にされなくても。

朝起きたらまず誠一の部屋に行き、彼が大学に行った後は食器を片付け、洗濯をし、帰ってくれば彼の近くにそばに寄り添う。そして彼の安らかな眠りを見届けて自分も帰る。

それだけで栄子は満たされ、満足だった。

あの女が来るまでは。

時々電話をしているのは栄子も知っている。だが、いちいち気にしてはいない。男の多少の浮気くらいは目を瞑り、最後には自分のところに帰ってきてさえくれればいい。栄子も一度目の失恋で大人になったのだ。

だが、誠一はこともあろうに栄子の目の前に女といちゃつき始めた。

女の手料理をおいしそうに食べ、自分には見せたことの無い笑顔を向け、栄子ですらまだのキスをし、さらにベッドに押し倒した。

栄子の怒りは頂点に達した。

この怒りが栄子の存在感を増させたのか、女は栄子に気付き、部屋を飛び出した。

この時点で栄子は誠一を殺してやりたいほど怒り狂っていたが、謝ってくれるなら許そうと思っていた。男なのだから一度くらいの浮気はまだ許せる。

栄子は大人の女なのだ。

だから、彼が素直に謝り、自分の元に帰ってきてくれるなら、あの女のことは水に流し、許してあげてもいい。

そう思っていた。

だが、彼の口から出た言葉は――

「君とは……付き合えない」

この言葉を聞いた途端、栄子の怒りは頂点に達した。

もう殺すしかなかった。

あんな泥棒女に渡すくらいなら、自分で殺してしまった方がいい。失うよりも自分の手で殺した方が喪失感も少ない。

だから栄子は殺した。

しかし、それではまだ怒りが収まらない。やはりあの女も殺すべきだ。自分の男を奪っておいてこれから先のうのうと生き、別な男とくつつくなど、栄子は許せなかった。

だから、警察署に忍び込み、刺した。背中からぶっすり。

これで栄子はすっきりした。警察に目を付けられているが、警察ごときに自分を捕まえることなどできない。

何しろ、隣に立っていても気付かないのだ。誰が逮捕できるのだ。

そう思って栄子は夕食を買い、悠々と自宅に戻っていた。その途中、たまたま見た外に展示してあるテレビのニュースを聞いて耳を疑った。

「本日正午過ぎ、鈴川警察署で何者かに刺され、重態となっていた女性がつい先程、意識を取り戻しました。以前集中治療室での治療が続いていますが、命に別状はなく、捜査本部は明日、女性の状態を見て事情を聞く方針です」

「……うそ」

そんな馬鹿な。あれだけ深く刺したのだ。急所かどうかは分からないが、かなりの出血だった。

助かるはずがない。

だが、死んだのを確かめたわけではない。あの後すぐに救急車が到着したため、一命を取り留めた可能性は高い。

「……殺さなきゃ」

栄子はそう呟くと、鈴川総合病院へ歩き出した。

ナイフを持って。

深夜の鈴川総合病院は静まり帰っていた。

明かりが点いているのは守衛室とナースステーションのみである。この程度の警備など、栄子にとっては無いも同然だ。

栄子は正面玄関から堂々と入り、集中治療室へ真っ直ぐ向かう。

現在集中治療室で治療を受けているのは一人。あの女しかいない。

栄子は集中治療室の扉を開け、唯一装置が稼働しているベッドに近づく。ベッドの上にはシーツを掛けられた人物が静かに寝ている。

意識を取り戻したらしいが、まだ予断を許さない状態、ということだろうか。

「……痛い？」

栄子は寝ている女に向かってぼそりと取り掛ける。

返事はない。

「痛い？」

やはり返事はない。

「安心して。今楽にしてあげるから」

栄子は優しくそう言うと、ポケットから折り畳みナイフを取り出し、両手で持って振り上げる。

これを振り下ろせば今度こそ死ぬ。もし装置が警報を出しても、人が来るまでに三、四回は刺すことができる。

さすがにそれだけ刺せば死ぬだろう。

「ばいばい。泥棒猫さん」

「残念ながら泥棒を捕まえる方ですよ」

「!？」

声が聞こえた途端、シーツが舞い上がり、栄子の視界を塞ぐ。栄子はとっさにシーツを切り裂き、ベッドを見る。

ベッドの上は無人だった。

栄子が異常を感じて下がった瞬間、集中治療室の電気が点く。入り口近くには黒いパンツスーツ姿で頭におかしな機械を着けた女性だった。

「やっと会えましたね。碓氷栄子さん」

「誰？」

栄子は女性を睨みながら問い掛ける。

「鈴川署捜査一課の大槻です。碓氷栄子さん。貴女を殺人及び殺人未遂の容疑と銃刀法違反の現行犯で逮捕します」

「警察……！」

栄子は目を見開き、唸るように言う。

「なぜ！ 事情聴取は明日じゃ……」

「罨だよ。碓氷栄子。単純な罨だ」

いつからいたのか、集中治療室の隅には白衣を着た長い黒髪の男性と、同じく白衣を着た女性が立っていた。この二人も警察関係者だろうか。

「君はここの情報をニュースを頼りにやってきたな？ 柏谷ゆかりが意識を取り戻し、この病院の集中治療室にいます。だが、それは残念ながら我々が流したデマだ。君を誘き寄せるための罨」

栄子は息を呑む。自分がはめられたことに気付いたのだ。

「君は執念深い女だ。殺したと思った憎い相手が生きていと分かたら殺さずにはいられない。それまでは逃げもしない。だからデマを流し、ここで張り込んだのだよ」

「じゃあ、あの女は……」

「最初からここにはいません。別な病院で未だ生死の境を彷徨っています」

香織が一步踏み出す。

「碓氷栄子さん。貴女の能力ももう分かっています。この機械は貴女を視認するためのものです」

「!」

栄子は驚愕を隠せなかった。今まで自分のこの特異な能力に気付いた人間もいなければ、対策

を施した人間もいない。

一体この連中は何者なのだろうか。

「なるほど。本当に見えんな。いや、脳が見ることを拒否しているような感じだ。声は聞こえるのだがな。実に興味深い」

「碓氷栄子さん。自首して下さい。これ以上罪を重ねないで」

だが、今更栄子は止まらない。あの女は殺さなければならない。生きていだけで我慢ができない。

それを邪魔するのなら――誰であろうと殺す。

「邪魔……」

栄子は香織を睨みつけると、ナイフを握りなおす。

「……公務執行妨害も追加ですね」

「邪魔する奴は皆死んじゃええええええ！」

栄子は雄たけびを上げながら香織に飛び掛ってきた。

香織はこちらに向かってくる栄子をディスプレイ越しに見据える。

確かに見える。はっきりと。これなら栄子を逃がさず捕らえられる。

身体能力は普通の人間のはずだ。それも格闘に関しては素人。これならば鍛えている香織の方が圧倒的に強い。

香織は栄子の動きを見る。

「!？」

ここで香織はようやく気付いた。自分もまた、能力を封じれてしまったことを。

動揺する香織に栄子はナイフで突いてくる。

「くっ！」

香織はそれを横に飛んで交わす。

動揺しては駄目だ。集中しなければ。今の動きで分かった。動きが単純かつ直線的。やはり栄子は素人だ。

栄子の次の攻撃を受け流し、取り押さえる。

香織は再び栄子の動きを見る。

次の瞬間、集中治療室の電気が消えた。

香織はしまった、と思った。

集中治療室の電灯のスイッチは香織の背後だった。香織が避けたため、栄子が押せる位置にきてしまった。

まずい。

香織は空気がわずかに動くのを感じ取ると、反射的に後ろへ下がる。

目の前を何かが通り過ぎたようだ。

おそらくナイフだ。

「いかん！ 大槻刑事！ ディ스플레이を捨てるんだ！」

「え？」

香織は譲治の台詞の意味が分からず、聞き返す。

「電源ランプだ！ 電源ランプが光って丸見えだ！」

「！」

香織が気付いた時には遅かった。

栄子が既に接近しており、そのナイフを香織の太ももに突き立てる。

「ああああ！」

「邪魔しないでよ！ あの女殺すんだから！」

栄子はそう言って太ももからナイフを引き抜くが、香織もやられっぱなしでいるわけではない。

目の前にいるだろう栄子の服を掴むと、力任せに投げ飛ばす。技とはとてもいえない乱暴な投げ方だが、咄嗟の判断の反撃としては十分だ。

栄子は投げ飛ばされ、近くのベッドに背中を叩き付けられるが、太ももの痛みのせいでうまく投げられなかった。おそらく大したダメージになっていない。

香織はすぐさまヘッドマウントディスプレイを投げ捨てる。

暗闇の中で誰かが走って逃げて行く音が聞こえた。

「くっ！」

おそらく栄子が逃げたのだろう。

香織は立ち上がろうと足に力を入れるが、激痛が香織を襲う。

「くううう……」

香織は激痛に耐え、よろよろと歩き出す。だが、やはりうまく歩けない。刺された左足に力が入らず、よろめく。

「おっと」

その体を譲治が支える。

「どうした。大槻刑事。君らしくもない」

「す、すみません。博士。せっかく用意してくれたのに私はあのディスプレイとは相性が悪いようです」

「どういうことかね？」

「私の目は裸眼じゃないと駄目なんです」

「――そういうことか」

譲治は納得したように呟くと、香織の腕を肩に回し、支える。さらに反対側は木春が支え、三人で並ぶようにして歩き出す。

「博士。急ぎましょう。緒方警部補には彼がついていますが、心配です」

「そうだな」

栄子は集中治療室から駆け出すと、玄関ロビーに向かう。

外に出て人混みにでも紛れてしまえば警察に自分は探せない。あの大槻とかいう女刑事が頭に被っていた物、あれはおそらくヘッドマウントディスプレイだ。

栄子は自分の能力が機械に働かないことを知っている。おそらく、ヘッドマウントディスプレイにカメラを接続し、栄子の姿を見ていたのだ。

種さえ分かれば怖くはない。とにかくカメラやあのヘッドマウントディスプレイに気をつければ見つかることはない。

今度はゆっくりとあの女を探し出し、確実に息の根を止める。

それが終わったら鈴川市から出よう。

そこで新しい彼氏を作ってやり直すのだ。

栄子は新しい人生に期待を膨らませながら玄関ロビーに駆け込み、一直線に正面玄関を目指す。

だが――

「生まれ！ 碓氷栄子！ 警察だ！」

叫び声と同時に玄関ロビーの電灯が点き、自分と正面玄関の自動ドアの間に体格のいい角刈りの中年男性が銃を構えながら割り込んできた。

栄子は舌打ちをする。

まただ。こいつも自分のことが見えるのか。

だが分からない。目の前の男性はさっきの女刑事が着けていたヘッドマウントディスプレイを着けていない。だが、銃口は真っ直ぐこちらを向いている。

栄子は自分の能力が万能ではないことを知っている。

見える見えないをある程度コントロールでき、見せたい時に自分の姿を見せることは可能だ。

もちろん、姿を隠すことも。

しかし、万人に見えないというわけではない。いわゆる勘のいい人間は時折能力を使っていても見つかることがある。

あの女がそうだった。誠一の部屋に入ってきた時から栄子の存在に気付いていた様子がある。

そして、ベッドに押し倒された瞬間、栄子に気がついたようだった。

どこまでも腹の立つ女だ。その勘の良さのおかげで栄子はこうして警察に追いかけている。

目の前の男性もあの女、柏谷ゆかりと同じ、いい勘の持ち主だろうか。

「大人しくしろ。碓氷栄子。もう逃げられん」

栄子は応えず、男性を見る。そして、ゆっくりと横に移動する。男性は栄子の姿を――

「やっぱりね」

追って来なかった。声を上げた瞬間、銃口は栄子の方を向いたが、さらに移動した栄子の方へ向ける様子はない。

見えていない。ただのはったりだったのだ。最初こちらに銃口を向けたのは足音のおかげだろうか。ならば、こちらが音を立てずに動けば逃げるのも殺すのも簡単だということだ。

「見えていないんでしょう？」

男性が銃口をあちこちに向けるが、栄子の方へは向いていない。やはり見えていないのだ。

栄子は男性に近づき、ゆっくりとナイフを振り被る。

このままこのナイフを首にでも突き立てれば栄子の勝ちだ。その後ゆっくり逃げればいい。

栄子は握り締めるナイフに力を込める。

「ああ。見えちゃいねーよ。俺にはな」

だが、ナイフを振り下ろそうとした瞬間、男性が突如栄子の方を向き直り、銃口を向けて発砲

。

「ああああああ！」

弾丸は栄子には当たらなかったが、驚いた拍子に尻餅を付いてしまった。

「よう。結構美人だな。碓氷栄子。ようやく会えて光栄だ」

驚いて能力が弱まったのか、今度は見えてしまっているようだ。銃口がこちらを向いている。

「一発目は空砲だが、二発目は実弾だ。動くなよ」

「な、なぜ！」

「俺が君の位置を教えたんだよ。栄子」

聞き覚えのある声が聞こえた。

栄子は声のした方へ振り向く。

「もう止めるんだ」

そこに立っていたのは、栄子のよく知る人物だった。

伊藤正人。お互いの両親の手で仲を引き裂かれた以前の恋人だ。

同時に譲治と木春に抱えられた香織もロビーに到着する。香織はすぐに正人と栄子の雰囲気を探ると、そのまま見守り始めた。

栄子は追いついてきた香織の方を気にする様子もなく、呆然と正人を見る。

「まー……くん」

「どうやら俺には栄子がちゃんと見えるらしい。だから……こちらの緒方警部補に栄子の位置を教えたんだ」

栄子は緒方と呼ばれた男性の耳を見る。

耳には小型のイヤホンマイクが装着してあった。これでやりとりをしていたのだ。

思えば彼だけだった。いつも真っ先に栄子のことを見つけてくれるのは。

他の人間は栄子の存在に気付きもしないことが多い。

幼稚園でも、小学校でも栄子は気付いてももらえない、文字通り存在感の薄い人物だった。

だが、彼だけは栄子のことに関心、普通に接してくれた。

そして彼が来れば、他の人間も栄子のことを認識できるのか、普通に接することができる。

故に正人だけは栄子の位置を正確に把握できるのだ。

「まーくん……。どうして……」

「栄子。お前を止めに来たんだ」

正人は栄子の方へ近づいてくる。

「ずっと悩んでいたけど……。やっぱり、お前のことはほっとけない」

優しく、諭すようにそう言うと、正人はしゃがみ込み、尻餅を付いている栄子を真っ直ぐ見つめる。

「お前は面倒くさい女かもしれない。嫉妬深いし、思い込みが激しいし、疑り深い。でも……

それって、相手のことが好きだからなんだよな。ごめん。俺はそれに気付くのが遅すぎた」

正人は栄子を包むように抱き締める。

「俺、ずっと待ってるから。お前のこと、ずっと待ってるから。だから……」

「まー……くん」

栄子が消え入りそうな声で正人の名を呼ぶ。

万が一のために外科医にも待機してもらっている。すぐに処置をほどこせば助かるかもしれない。

「分かった。……大槻、やれるか？」

「はい。この馬鹿女は私の獲物です」

「任せたぞ。坊主、少し我慢だ」

緒方警部は腹部から血を流している正人を抱えると、階段を上がって行く。

「さて、おいたが過ぎましたね。碓氷栄子さん」

香織は床に倒れる栄子を見下ろして静かに言い放った。

「私、だいぶ怒っています」

怒りで沸騰しそうな頭をどうにか落ち着かせ、香織は栄子を睨む。

こんな馬鹿な女は許せない。自己中心的で、相手の気持ちを理解しようとせず、自分の都合と感情だけで人を傷つける。

香織はこういう身勝手な人間は大嫌いだった。

「なによ……。なんだっていうのよ！ 別にあんたには関係無いじゃない！ 私が誰を好きだろうが、元彼をどうしようが、全然あんたには関係無いじゃないの！」

「……ごちゃごちゃとうるさいですね」

香織は吐き捨てるようにそう言うと、構える。

「ぶっとばしてあげますからとっととかかってきて下さい。このメンヘラビッチ」

とても香織の口から出たとは思えない汚い言葉で栄子を挑発する。それほど頭に来ているらしい。

「……ぶっ殺してやるよ！ このマン○ス女が！」

栄子もまた頭に血が上ったのか、汚らしい言葉を吐きながらナイフを持って突進してくる。

やけくその突進だ。

香織は脳内を沸騰させながらも、冷静に栄子を見る。どれだけ頭に来ていても、格闘戦においてはいかに冷静になれるかで勝負が分かれることを香織は知っている。焦りや不安も禁物。

怒り任せの攻撃は自分にも危険だ。何より、香織の実力でそんなことをすれば、栄子は死んでしまう。

それでは駄目だ。この女には自分がやったことを分からせて、思い知らせてから刑務所に送らなければならない。

香織は栄子の動きを見る。

だが、当然ながら香織には栄子の姿は認識できない。

「死ね！」

栄子がナイフを突き出す。香織はそれをまるで見えているかのような体裁きでかわす。

「また……！ なんで私が見えるのよ！」

「別に見えているわけではありません」

香織は静かな口調でそう言う。

「私が見ているのは、未来の貴女ですから」

「ほう。なるほど。そういうことか」

讓治が納得したように頷く。

そう。栄子の能力は香織に確かに働いている。香織には栄子の姿を認識できていない。

だが、香織には栄子の知らない特異な能力がある。

未来を視る眼。

わずか三秒先が限界だが、香織には未来の映像がまるで重なったように視覚情報としてとらえることができる。

香織が見ているのは、未来の栄子の姿なのだ。

たとえ今の栄子の姿を認識できなくても、栄子の能力は今現在の栄子にのみ働く。よって、未来の栄子の姿は香織にとっては普通に、当たり前に見えるのだ。

先ほど香織が栄子の未来を視ようとして視えず、戸惑ってしまったのはヘッドマウントディスプレイを着けていたせいだ。

香織自身もそのことを失念していた。

香織の能力は眼鏡等、たとえ透明でも遮蔽物があると無効化される。当然、CCDカメラによる映像でも未来は視えない。普段掛けている眼鏡も視力強制ではなく、普通の人間の視界にするための伊達眼鏡なのだ。

だからあのディスプレイはむしろ香織には足枷にしかならなかった。そんなものが無くても香織は栄子の姿を捉えることができる。

「未来が……視える？」

「ええ。三秒先までの映像がコマ送りのように私には視えていますから。貴女のすつとろい動きなんて丸見えです」

香織は悠然と栄子の方を向き直る。

「……」

格闘戦において素人の栄子にも分かる。わずか三秒先でも自分の動きの全てを読まれる恐ろしさが。

逃げようとも攻撃しようとも全て先読みされ、先手を取られるのだ。

「碓氷栄子さん。大人しく捕まって下さい」

栄子はスーツの内ポケットに手を入れる。

栄子はその一瞬の隙に香織を刺そうと近づく。だが、当然その行動は読まれる。

「小手返し」

ナイフを突き出した手を捕まれ、そのまま体を床に叩き付けられる栄子。

「かはっ！」

香織は悶える栄子を見下ろし、怒りを込めて叫ぶ。

「貴女は自分が何をしたのか分かっているんですか！」

「ごほっ！ な、何を……」

栄子は咳き込みながら立ち上がると、再度香織に向かって突進する。

香織は栄子の右手首を掴むと、弧を描くように回転させる。突進のベクトルを直線から回転に変えられた栄子の身体は、綺麗な円弧を描き、床に激突する。

「げあ！」

衝撃で叫び声と共に涎まで出てくる。

栄子はようやく悟った。この女はただ未来予知ができるだけではなく、そんな能力がなくても十分強い、達人級の格闘者であるということ。

「貴女は……たった一人の理解者を刺したんですよ！」

「理……解者？」

栄子はうつ伏せになり、手をついて立ち上がる。

「なんの……こと？」

息を切らしながら栄子は香織を睨み付ける。栄子はその視線を悲しげな表情で受け止める。



「もう……分かってるんじゃないですか？」

「……」

栄子は答えない。

「正人君は貴女のことを認識できるたった一人の男性かもしれないんです」

「……何を言ってるの？ 私がその気になれば認識させるくらい——」

「君の能力が通じない。そういう意味だ」

これまで黙って静観していた譲治が不意に口を開く。

「彼は君がどれだけ能力を使おうと、君を認識できる。他の人間と決定的に違うのはそこだ。彼だけは君のことを見れるし、存在を認識できる。それもまた異能と言えよう。幼少期から君のそばにいたことが原因かもしれないが、それは分らん。だが、これだけは言える。君が自分自身のことを見て欲しいと願うなら、その願いを叶えられるのは彼だけだ」

「……」

栄子は唇を噛んで黙る。

彼だけは違う。それは栄子も分かっている。なぜか彼だけはどんな人ごみの中からでも彼女を見つけてくれたし、誰もが栄子に気づかない中で真っ先に栄子に話しかけてくれた。

彼だけは栄子のことを見てくれている。

だから好きになった。自分だけのものにしたかった。

だが、彼は栄子のそばに居てくれなかった。

「今更……今更よ！ だってまーくんは私の所にはくれなかったじゃない！ 私が大学に行っても、彼氏ができて、ほったらかしだったじゃない！ 私のことが嫌いなんだよ！ だから離れていったんだよ！ そうよ！ どうせ私は一人よ！ 誰にも気づいてもらえない、誰にも声を掛けてもらえない、誰も気にしてくれない！ まーくんも、誠ちゃんも結局私のことなんかどうでもいいんだよ！ こんなに好きなのに！ こんなに愛しているのに！ どうして私のそばにいてくれないの！」

それは栄子の心の叫びだった。栄子はその能力ゆえ、孤独だった。両親ですら栄子の存在に気づかないことが多く、幼少時はそれで怪我もした。

話し掛けても無駄。返事はもらえない。なら、喋るだけ無駄だ。栄子はそうして喋らなくなり、正人と出会うまでは一人だった。

だが、正人もまた自分の元を去ってしまった。

栄子はこれで完全に孤独になった。

異能者故に人並みの幸せすら望めなかった。

香織は栄子を悲しい瞳で見る。

「……彼は、貴女の元を去ってはいません。ずっと探していたんです。正人君の両親と貴女の両親は貴女達を引き離し、お互いの情報を隠しました。正人君は先月退院してすぐに両親に無理やり引越し先に連れられ、貴女との接触を禁止したのです。それでも彼は貴女のことを探し出して来ました。得られる情報が少ない中で、貴女のアパートを見つけ出したんです」

「……嘘よ。だって、調べればすぐにわかるじゃないの」

「貴女の両親は日本にはいない。貴女は正人君の入院後、すぐに今のアパートに移された。その情報は正人君の両親すら知らない。同じ学校だった人間は、貴女のことをほぼ覚えていない。そ

れでも彼は貴女に会いたくて、自力で貴女の居場所を突き止めたんです！ 貴女に会いたくて！

それなのに貴女は彼に何をしたんですか！」

「う、嘘よ！ 嘘！ 嘘！ 嘘！ 嘘だ！」

「いい加減に目を覚ましなさい！ 今のこの状況は！ この結果は！ 全て貴女が原因なんです！ 最初から正人君のことを信じていれば、彼を傷つけていなければ、彼はずっと貴女の元に来てくれたはずですよ！ 貴女は自分で彼を傷つけ、壊し、そして失ったんです！ そしてついさつき、貴女は二度も彼を傷つけた！ 貴女とやり直したくて来てくれた彼を！ だから貴女は大馬鹿野郎なんです！」

香織は泣きながら叫んだ。香織もまた、異能の力ゆえに失ったものがあるから。

栄子に分かって欲しいのだ。本当に大切なものの存在を。

「正人君のことが好きなくせに、貴女は彼のことをぜんぜん理解していない！ 理解しようとしていない！ そして一度失ってもその大切さが分からない！ 貴女は度し難い大馬鹿野郎です！」

「うるさい！」

栄子は親の仇を見るような目で香織を睨む。

「うるさい！ うるさい！ うるさいうるさいうるさい！」

栄子は髪を振り乱して叫ぶ。

「だって一分からないんだもん！ どうすれば好きになってくれるか！ どうすれば私のそばにいてくれるか！ 誰も教えてくれないし、誰も助けてくれない！ でもそばにいて欲しくて！ 愛して欲しくて！ だから彼を自分のそばに置くしかなかった！ それしか思いつかなかったんだもん！」

栄子は泣きながらそう叫んだ。香織は栄子を静かに見つめてこう言った。

「貴女がたった一つやればよかったこと。それは――信じることです」

「信……じる」

「彼のことが好きなら、彼を信じて、彼の言葉を信じていればよかったんです。でも……貴女は彼の言うことが信じられず、彼を縛ることでしか安心できなかった。それが……彼を傷つけた」

「そんなこと……そんなこと今更言われても……」

「……まだ遅くありません。彼は死んだわけではないんですから」

香織はゆっくりと栄子に近づく。

栄子は完全に戦意を失っている。

「裁きを受けて、罪を償って、そして彼ともう一度やり直して下さい。きっと……正人君は待っています」

栄子は懐から手錠を取り出し、栄子に掛けようと手を取る。

「ふ……ふふふ」

「？」

「あんたって……ほんといい子ちゃんだよ」

「！」

不意に香織の顔面に何かを噴霧される。

油断し、未来予知をしていなかったため、香織はその何かをまともに受けてしまった。

途端に咳と涙が出てくる。

「催涙スプレー……」

「油断したわね。ほんとと貴女って現実を見ていない甘ちゃんね」

「栄子……さん！」

香織は栄子を掴もうと手を伸ばすが、栄子はその手をひょいとかわすと、正面玄関から逃げて行く。

「くっ！」

香織はうっすらと目を開けて栄子を追いかける。

刺された足が痛むが、栄子もまた香織に投げられたダメージがある。そう早くは動けないはずだ。

「世話が焼ける刑事さんだな」

譲治と木春が再び肩を貸す。

「す……すみません」

「何。この程度しか手助けできんからな」

三人は栄子を追いかける。栄子は既に病院の駐車場を通り抜けていた。

「碓氷栄子！ 止まりなさい！」

情けない姿ながらも、香織は叫ぶ。

栄子はその声に反応して振り向く。その顔には笑顔があった。まるで全てを諦めたかのような空虚な笑顔が。

香織はもう観念したものと思ったが、次の瞬間――

「！？」

乗用車が栄子を跳ね飛ばした。

栄子の能力は非常に脅威だが、諸刃の剣でもある。

気づかれないということは、気づいてもらえないということは、誰も栄子に対して注意をしてくれないということだ。

乗用車の運転手は栄子の上に全く気づいていなかったのだろう。

ブレーキを掛けずに栄子の上を跳ね飛ばした。

栄子の身体は乗用車の上を転がり、アスファルトの上に叩きつけられる。

車はそのまま走り去って行った。

「栄子さん！」

香織は二人を振り切って、出血し続ける足を構いもせずに栄子のところへ走り寄る。

「栄子さん！ 栄子さん！」

栄子は呼び掛けに反応し、目を薄く開く。

「もう……何もかも……遅いから……。彼の……邪魔を……これ以上したくないから」

「！」

香織はようやく栄子の本心を理解した。

栄子は自ら乗用車に跳ねられたのだ。彼女は自分が殺人者で、異能者で、法的な裁きなど無意味であること悟った。

罪を償えば、服役すれば、と香織は言った。だが、彼女が刑務所から出所できるかどうかもそ

もそも分からない。

そしてそれ以前に、彼女をそんなところに送り込むのも不可能だ。

誰も彼女に気づかないのだから。

気づかれない。故に裁かれもしない。裁かれなければ償いもできない。

栄子はそれが分かっているのだ。

だから自分で決着をつけたのだ。

「栄子さん……」

「……まーくんに伝えて……。ごめんね……。……って……」

栄子はそう言い残すと、目を閉じ、笑みを浮かべたままこと切れた。

香織は栄子の遺体を抱きかかえる。

「……伝えます。必ず」

事件から一週間後、栄子に刺された足もだいぶ良くなった香織は、超常現象研究所を訪れていた。

「足はもういいのかね？」

「はい。だいぶ。来週には抜糸ができそうです」

「なによりだ」

木春の出した紅茶を飲みながら、少し悲しそうな笑顔を見せる香織。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

火煉が心配そうに香織の顔を覗き込む。

「大丈夫。心配してくれてありがと」

香織は火煉の頭を撫でながら微笑む。火煉はそれでもまだ心配なのか、香織の隣から離れようとしなない。

「事件はその後どうなったかね？」

「はい。そのことで伺いました。事件は碓氷栄子の事故死で終わりです。柏谷さんも意識を取り戻し、正人君も命に別状はありません。ということで、今回の事件は殺人一件、殺人未遂二件として被疑者死亡のまま書類送検されました」

「そうか」

讓治は紅茶を一口飲むと頷く。

「あの……博士」

「何かね？」

「私は甘ちゃん……ですか？」

「うむ」

即答する讓治。

「はっきり言われると傷つきます」

若干むくれながら讓治を睨む香織。

「甘ちゃんというより、君は優しいのだ。誰でも助けようとしてしまうし、犯罪者でも救おうとしてしまう。それを偽善者と罵る者もいるだろうし、それを甘いと断じる者も多いとは思いますが――」

讓治は真っ直ぐ香織の方を見て言った。

「私はそういう君が好きだがね」

「へ？」

途端に顔を赤くする香織。

変人とはいえ、黙っていれば美形な讓治に真っ直ぐ目を見てそう言われると、どきりとしてしまう。

「まあ、君はそのままでもいい。助けられる人間なら助けた方がいいはずだ」

「……」

香織はそう言われて少し笑うと俯く。

「君はなぜ刑事に？」

「……私、高校時代は不良だったんです」

「ほう。とてもそうは見えんが」

「……不良というより、孤立してました。全てにおいて諦めていたんです。三秒先の未来を見ても、三秒でできることなんてない。三秒後に事故に会う目の前の人を救うこともできない。普通の人には見えない物が見えてしまうせいで孤立して、不貞腐れてました。そんな時あって私を助けてくれたのが女性の刑事さんなんです」

香織は昔を懐かしむような表情で続けた。

「私は町で変な男の人達に絡まれ、拉致されました。未来が見えても喧嘩なんかしたことの無かった私は抵抗できず、知らない場所へ連れて行かれそうになった所に飛び込んできてくれたんです」

「ほう。まるでドラマのような展開だな」

香織はクスリと笑うと頷いた。

「本当にドラマみたいでした。女の人なのに物凄く強くて、あっという間に男の人達を倒しちゃったんです。その人は私に格闘技を教えてくださいました。私の目のこともその人はすぐに気づきました。でも、気持ち悪がらずにこう言ったんです」

「その目にはきっと意味がある。その目で助けられる人が必ずいる。だから大事にしろ、」

未来を見るという特殊な目。この目のことがコンプレックスになっていた香織にとって、その言葉は救いだった。

意味がある。これで誰かを救えるかもしれない。

そう言われた香織はこの目をコントロールする方法を自分で身につけたのだ。

「私はその人のようになりたくて警察官になったんです。警察官になって……私みたいな、自分の能力をうまく使えず、自分も周りも傷つけている人を助けたいって思いました」

「なるほど」

讓治は感心したように頷く。

「でも……今回も助けられませんでした。佳奈ちゃんの時のように……」

遠藤佳奈。一ヶ月ほど前に起きた連続焼死事件で、その身に宿る異能の力で母親の復習のために次々と殺人を犯し、炎に焼かれて死んだ少女。

その少女も栄子も、自分の能力故に誰かを傷つけ、そして自分も傷つき、死を選んだ。

香織には救うことができなかった。

「助けられる、と思うのはおこがましいことだと思うぞ。大槻刑事」

讓治は諭すようにそう言った。

「君は全知でも全能でも神でもない。助けたい人間を全員助けるのは不可能だ。だが、助けようとするその心は忘れないで欲しい。立ち止まるな。今度は助ければいい。目の前の自分自身と同じ人間を」

「……はい。そうですね」

「？」

香織はそう言って微笑むと、助けられなかった少女と同じ顔をした火煉を抱き締める。

火煉は不思議そうに目を開くが、すぐに安心したように香織に抱き付き、安心したように目を閉じた。

phassa.vol4

<http://p.booklog.jp/book/63084>

著者 : phassa生徒会

編集 : yasuoman

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/phassa/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/63084>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/63084>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ